明治二十六年七月十五日發行

THE HOME JOURNAL

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價金五錢

每月一回



第拾壹號

人見一太郎著

國民的大問題

十六日發賣紙數大凡二百五十頁以上

日本學生が米國に於て、學校より拒絶せられんとするは外交上の最近問題也本著は是に向て一大鐵案を下せり

(第一)條約締結及改正の歷史にして本著の如く正確詳細斬新なるはあらず(第二)現行條約、政府の各草案は勿論條約改正に必要なる文書は總て漏さず(第三)世界に於ける日本現今の地位、を明かにし(第四)條約改正の準備を論ず(第五)現行條約は**死條約**なり何故に然る乎、何故に死滅せし乎、何の事實、何の證據ありて然る乎、本著『第五』を看よ(第六)現行條約は元來**暹羅條約**を根基として作られたるとを闡明す、何故に然る乎、我邦何故に半亡國と同等の對遇を受けたる乎、此新意見は『第六』に於て始めて見る可し(第七)今日の所謂治外法權の釋義は締結當時の精神に反し、現行條約中にも含有せざる不都合なる釋義にして全く外人の曲解なるを明にす、外人一見愧死せん(第八)は關稅改正論也(第九)內地雜居論に至りては滔々數萬言、頁を爲す幾十快絕叉壯絕(第十)は土地所有論なり(第十一)著者が天下に率先して『國民之友』紙上に叫破したる外人所有**土地沒收論**は新なる面目を以て其中に現はる(第十二)條約改正の方策二帖、憤ふるが如く悲むが如く正々堂々の中外交上必勝の大政策を保有す、鬼神躍り、劍戟鳴る、一讀誰れか敵愾の心なからん要するに著者が逐號『**國民之友**』に掲げたる大篇**條約改正論**は本著の一部分のみ文辭相同じきもの百行餘に過ぎず

發行所 民友社
東京市京橋區日吉町四番地

民友社發兌消夏書目

夏の日は來れり、綠蔭沙邊に座して、長天大海を睥睨する處、山莊水亭に臥して、蟬聲流水を靜聽する處、利益と快樂とを以て、必ず好伴侶たらんものは本社發兌の消夏書籍に如くはなし、請ふ把つて身邊に置け。

三版 靜思餘錄

德富猪一郎著

定價十五錢 郵稅二錢

一種の詩、一種の宗教、一種の哲學、民友子が人生に關する理想は此篇に彰はる。淸潭の淺さに似て深きは其教訓なり。稻葉を渡し夕風の如きは其文なり。磯馴松の蔭、山樓半夜の燈下、靜かに讀んで心身無限の快樂を覺ふるものは靜思餘錄也。

再版 青年と教育

德富猪一郎著

定價十五錢 郵稅四錢

此の夏の間に心身を一新し、來る秋より大に奮つて勉めんとする志ある青年の、速やかに購讀せざる可からざるものは此篇也。

再版 人物管見

德富猪一郎著

定價十五錢 郵稅二錢

我名士を論評する快刀大竹を割る如く庖丁の牛を解く如く一見快風胸間に生ずるは人物管見也。

四版 誕生日

德富猪一郎著 久保田米僊畫

定價十五錢 郵稅二錢

詩あり、歌あり、語あり、句あり、美麗なる插畫あり、父母親戚朋友弟妹の手蹟帖として、淸潔高美なる家族の間に、薰風の吹て、紗簾に入るが如く、幸福、和樂、融情、平康の福音を齎すものは則ち是れ。

九版 新日本之青年

德富猪一郎著

定價二十錢 郵稅四錢

新日本の青年よ、讀め「新日本の青年」を！健全眞摯懇篤忠實なる教訓勸言を以て滿てる無言の朋友は爾の來り披くを待つ。

再版 懷舊

ヴヰクトル、ユーゴー著 森田思軒居士譯

定價二十錢 郵稅四錢

ユーゴーの文は豪宕徹底、思軒居士の譯筆、神驚鬼哭、忽ちにして黑風、忽ちにして白雨、讀過一番腋下涼冷を覺ふ、讀んで必ず眞味を知れ。

再版 幕府衰亡論

櫻痴居士福地源一郎著

定價卅五錢 郵稅六錢

其の論は宛轉雄渾、其の文は雍容豐富、其の事は則ち實地目擊の所、歷史の快味は斯の如き好著に依つて知るべきなり。

家庭雜誌定價表

	前金	郵稅地方共
一冊	五錢	五錢五厘
六冊	三拾錢	三拾三錢
十二冊	五拾錢	五拾六錢

廣告料　二拾四字行數回數に付割引無　八錢　本社は前金にあらされば發送せず

爲替は芝口郵便局宛郵券代用は爲替の無き地に限り一割增しの事

發行兼印刷人　垣田純朗
編輯人　塚越芳太郎
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治二十六年七月十五日發行
家庭雜誌第拾壹號

目錄

貴ふして驕らず……（久保田金僊筆）

社説
夏の樂み……一

論説
家庭の賞罰……三

科學
最も勤勉なる國民……六

史談
鐵公ビスマークの家居（上）……一〇

文藝
歌方姫……嵯峨のや主人……一三
活ける鏡……皷日生……一六
ルエリンの愛犬……スペンサー作 家永えい子譯……一七
貴ふして驕らず（斷翰）……二一

家政
如何にして夏を過ごさんか……二二
束髮……二四
最も簡便なる海水浴……二六
調理談……二七
丸焼茄子
ウソ煮
ゴマ煮
鳳梨
鳳梨煎餅
また
手藝案内……二八
麥藁細工
しみぬき法
二丈六尺の布を以て
社交一斑……三一
西洋禮式一斑（承前）……洋癖子……三一
食禮
流行の栞……春夢……三三
織姫繻子
薄絹
團扇
岐阜提灯と支那燈籠
一種の根掛
日用品物價……三五

雜錄
遺珠顆々……三五
女學校……三六
其一　東都私立學校（承前）
談叢……三七
人は容貌より心から
水泳

繪畫
丹青叢談……蕉隱生……三八
無聲詩話（二）……四〇

時事一斑
夏……四三
騎馬旅客歸……四三
教大臣教育意見……四四
醜業窟……四四
行樂……四四

投書
妻を擇ぶ事……かすみ女……四五



社説



夏の樂み

石も木も眼に光る暑き時節とはなりぬ。夏は暑しと云ば、苦き様なれども、暑さの側には、涼しきあり、一掬の涼風、千萬金にも價し難し。『樂は夕顔棚の下た涼み』、嗟呼此の樂みや、眞に人生の最も健全なる樂しみにあらずや。

一家打ち寄りて笑ひ興ずるは、夏を以て最上の時節とす。遠方に遊學したる少年少女も、避暑休暇には、歸り來るなり。迎らるゝものゝ樂は、云ふも更らなり、迎ふるものゝ樂みは、如何ばかりぞや。

慈母が夢に見し小童の姿と思の外、今は立派なる青年となり、挨拶も大人びたるも興あり、家に在る幼弟幼妹が、人みちしつゝ、お客は何處より來ませし杯と細語くも興あり。惟ふに避暑休暇の、今日此頃には幾多の福島中佐は、日本國中の家々に於て、驩迎せらるゝなる可し。

斯く寄り集りたる家族相携へて、旅行をなすも、亦た樂みの一事なり。

生白き小兒の顏も、日に炙られ、潮に曝され、烏の子の如くなるも面白し。『涼しさや日の落かゝる海上』沖の夕日の末霽れて、涼風天末より吹き渡る濱邊に、ひた〳〵と打ち寄する波に足を洗はせつゝ、一家老幼打ち連て、逍遥するも亦た妙なり。

或は峯高く雲深き温泉に遊び、脚下に雷を聽き、袖に

雲を宿し、里は夏未だ酣なるに、早くも溪間、野邊に咲き出る秋の艸花を採るもよし。

獨り樂むは衆と樂むにしかず、避暑旅行には、家族同伴す可きは勿論、親しき間柄ならば、甲家、乙家幾多の家族相ひ伴ふも可なり。家族の聯邦共和國は、時によりては、賑々敷樂事なり、併しながら興盡れば、各其の志す方へ別れ行くも可なり。」



臺所より外天地あるを知らざる主婦の如きも、せめては夏なりとも、廣々したる天地に呼吸し、命の洗濯をなす可し。分けて老人抔はくよ〳〵と暑さ懵さを呟つの愚をなさず、山青潮白の地に遊ばゝ、延命不老の靈藥を飲むよりも、幾倍の効能あらん。

夏は小兒の天國なり、彼等が厚き重き綿服に纒はれて、起歩自由ならざる冬を過ぎて、蟬翼よりも輕き衣を着け、コロ〳〵と奔り廻る樣の如何に勇しきよ。冬に匍匐したる赤子も、夏になれば衣の輕きと共に、又輕きが故に起つ樣になるなり。伏すものは起ち、起つものは奔る。彼等が大敵なる感冐も來らず、更らに恐る可き馬脾風も來らず、若し飲食さへ謹めば、小兒は夏に於ては、無病息災なる可し。

されば夏は最も樂しき休息の時節なり。老人も、小兒も、その他恒に家に在る主婦も、恒に外にありて俗務

に從ふ主人も、總ての家族、皆な打ち連れて旅行す可し。是れ衛生の爲めのみならず、亦た心を養ふ所以なり。

若しさる餘裕なきものは、せめて家內打ち寄り、一個の板牀を庭に出し、松間よりチラリ〳〵と月の上るを眺め、老幼笑ひ興じて、月よりも大なる盤上の西瓜を割き、無邪氣なる話しにて、午夜を過すも可なり。『隣にもまだ唾ぬ笑ひ夏の月』、天國は則ち此の中に在りと知る可し。

夏の時節を善く過せば、命の洗濯をなすのみならず、亦た心の洗濯をなす可し。身健なれば、心亦た健かなり、善根は快活なる心腸より養ひ來ると知らずや。快活の心腸は、健全なる樂みより養ひ來るを知らずや。



論説

家庭の賞罰

家庭に風波を起こし、兄弟姉妹の間、長ずるに從て益々不和の狀を呈するもの、その源因種々なるべしと雖、一家に於ける賞罰の方その宜きを得ざるもの亦その大なる源因たり。

賞罰の不公平なるは、往々家に、不平黨を生ぜしめ、數口の家內、幾派に分裂なし、面に笑を含みて、心に劍を研き、隱々裏互に相鬩ぐに至る。所謂姑と妻との衝突は最も有勝の事なり、此時に當りて、主人の裁斷少しにても、不公平にして、妻に私するが如きとあらば、一家忽ち亂て麻の如くなる可し。兄弟姉妹互に喧嘩を爲すとは往々之れあり、此時若し、父母又は其長子にして、不公平の裁斷を下さん乎、その曲とせ

られ、非とせられ、少しにてもより惡しく取扱はれたる兄弟姉妹の一人は、必ず妬心を起していふ、父上は末子計り愛し玉ふて、吾れを惡み玉ふなり、曰く、彼兒の彼事を爲したるときには叱り玉はずして、我が彼事を爲したる時には痛く叱り玉ひたり、曰く姉上には彼の如き美なる衣服を與へ玉ふて、私には何をも與へ玉はずと、小兒の中より斯の如き、僻める心を起さしむればその者は成長の後、邪氣深く、猜疑心深く、他人と打とけて交はることの出來ぬ變物となるなり。而して玉の如き其兒をして此の如き荊棘の如き心を有せしむる者と爲すと否とは、一に父母又は嫡男長女たるもの丶、所作如何に在りと謂ふ可し。故に一家の政治は最も公平に最も平等なるを要す、即ち同一の宜しからざる事件は之を罰するに同一の罪を以てせざる可らず、妹之を爲す時には之を寛恕し、兄に於ては之を叱責するが如きは、直に不公平の感を兄の心に起さしめ、純白雪の如き兒の心は此時既に一點の墨に染まれたるなり、平等の觀念を以て學者の觀念となす勿れ、小兒は最も鋭敏なる平等の觀念を有す、故に兄弟姉妹の善き行狀、大人しき行狀を賞するに當り、少しの食物少しの玩具、少しの衣類等に平等を缺くことあらば、それより少しく分配せられたる小兒は必ず卑しき考を起し、直に天使より惡魔に墜落するなり。嗚呼、世の惡人、世の姦物、概ね是れ家庭の不公平不平等より生ずるとせば、世の父兄母姉たるもの、豈に心を此に用ゆることなかる可けん哉。

一國は道德よりも寧ろ法律を以て立ち、一家は、規則よりも寧ろ德義を以て立つ、故に一家の懲罰たる、裁判官が、罪人に對するが如く、傍聽人の前に審問し、判決するが如きある可らず、まして、衆人の前に於て、之を懲治するに於てをや。然るに世の父兄のその子弟を懲治するものを見るに、最も高尚なる家庭を除くの

外、概ね家人の前に於て、大聲之を叱責し、家人の前に於て、馬鹿者、不埓者、横着者、不調法者等の不吉なる詞を以て詈り、その甚だしきに至りては、畜生呼はりを爲すに至る、此に止まらしむるも、その結果恐るべきものあるに拘らず、更に家人の前に於て其子弟の頭を叩き、或はその足をつめり、或はその身躰を縛するとあり。その聞くに忍びざる悪聲と見るに忍びざる暴行は、その子弟に向て、如何なる反響を與ゆべき乎、彼等は他人と喧嘩するに及んで、直に父兄の口調を覺へ來りて、馬鹿者、横着者、畜生といふなり、彼等その幼弟を遇するに於ては、父兄の所作に倣ふて、之れが頭を打ち、之れが手をつめるなり、彼等成長したる後にも、その幼時に記憶せる所は、明かにして消す可らず、その子に對するも、その父の己れに對せるが如くす可し、故に父母にして、その兒に向て、悪德即ち罵詈、又は毆打を加ゆるは、悪德を子孫に遺傳するものと謂ふ可き也。

その悪德は獨り罵られ、打たれたる兒のみに止まらずして、之を見聞せる他の兒にも及ぶとを思はざる可らず、而して更に又た之れと同時に此の打たれ、罵られたる兒と他の兒との間に一の恐るべき關係を生ずるとを思はざる可らず、父母特に兄なる一兒を罵りて馬鹿者なりといへば、他の兒は、之を眞實なりと思ひ、其兄を輕んずるに至り、兄弟その和を失するに終るとあり、又た常に一兒を呼て、横着ものといへば、他の兒は、之を聞て、悪人の如く見做して、之を賤むるとあり、而してその罵られたるもの特にその毆打せられたるものに至りては、他の兒に對して、耻かしく思ひ、却て、憤激し、却て敎訓を仇にするあり、若し之に反し、兒過失ある時に當りて、其兒を別室に招き、循々として、その是非を說くに於ては、兒は喜んで、敎を奉ず可く、而して、毆打、鞭撻以て懲治するを要せざ

るなり、故に兒の過失あるに及で、之を叱責するは、決して、他の兒の目前に於てす可らず、必ず別室に於て、徐に之を教訓するを要す、父兄母姉若し斯の方針を以て、兒に對せば、一家は只一の教訓にて足れり、更に懲治なるものを要せざる也。今や世間特に下等の家庭に於ては、只懲治あるのみ、教訓なるものあらず、斯の如くして、一家の平和を欲し、一國罪惡なからんとを欲す、抑も亦難ひ哉。

科學

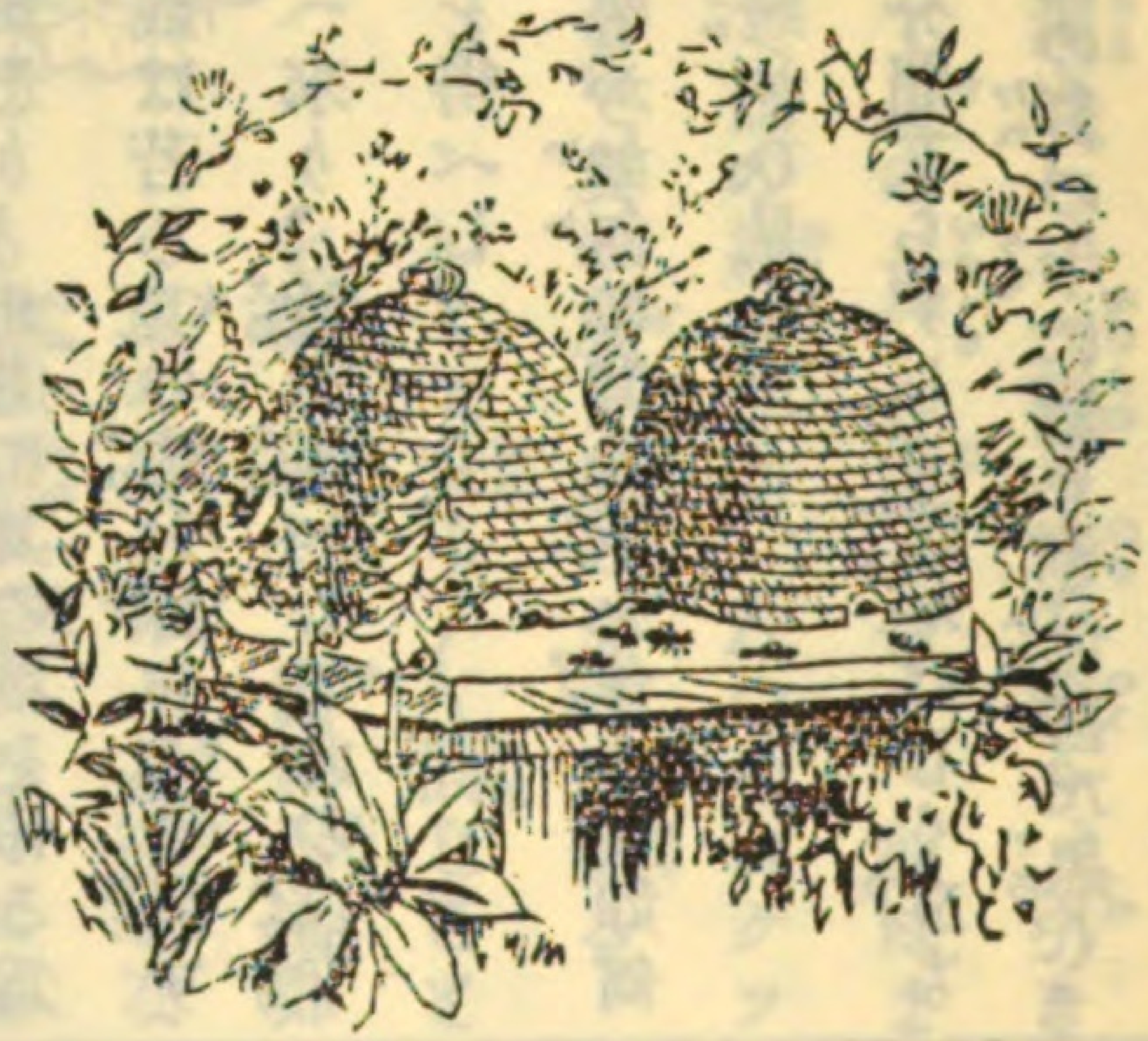
最も勤勉なる國民

春も過ぎ、夏も來りて最も好き機會を得たれば、いざ諸君と共に世界の最も奇しき都を見物せむ。此の都は人類の住める地にはあらざるも、此に住めるもの、數は甚だ多く、之を數へなば二三萬或は五六萬を得べからむ。此には街あれども路なし、住民は皆な家の壁の上を歩み行く。家の廣さは只だ其の家主一人のみを容るゝに足り、入口に戸あるのみにて、窓と云ふものはなし、此等の家は手にて建てられたるものにあらざれど、一軒一軒、一層一層、少しの歪もなく、少しの隙もなく立てられ、街の隅の其處此處には大なる廣き公共建築物ありて遊覽者の目を惹くに足る。

櫛の歯の如く密接して並べる普通の家屋は住宅として用ひらるゝあり、倉庫として用ひらるゝあり、倉庫として用ひられたるものには、夏の間、最も忙はしき勞作によりて集められたる食物蓄はへられ、冬の日、雪の道を塞ぎ、霜の草を枯らし、收穫をなすに由なき時の用に豫じめ備へらる。賢者上にあつて法を定め、教化行はれたればにや、住民は皆な其の堵に安んじ、出づべき時に出で、歸るべきときに歸り、留まるべきときに留まり、道に遺ちたるものなく、夜は戸を閉すの

要もあらず。

一人の女王ありて此の國を治む。女王と云ふ名は有すれども、獨り其の臣民のみを勞せしめ、己れは其の奉侍によつて遊び樂しむ如きとはなさず、定められたる法律に從ひ、止むを得ざるのことあるにあらずば、都の外に出づることなく、王としての義務を完ふせん爲めに、其の臣民と共に最も勤勉節制の生涯を送る。



日出づるより日沒するに至るまで、天氣晴朗なる日にあつては、此の都の如く忙はしく、活潑に、目覺ましき國はまたあらず。都の門は甚だ狹く、出づるものと入るものと辛ふして摩し違ふを得るに過ぎざるも、時刻々此を出入するもの幾百、幾千。或は新らしき家を建つる材木を運ぶあり、或は遠く冬の日を慮り、倉に蓄へんと食料を集め來るあり、一目見たるものには混雜、騷擾と思はるゝ中に、各々爲すべき業をなし、秩序を守つて失はず。

此の國を探撿して、初めて成功したるは盲目生物學者なるフランソア、ユーベルと其の妻と其の僕との三人にて、今より算すれば百數十年以前のこと、夫より多くの探撿者相踵ひて出で、今や此の國の風俗、習慣殘る所ろなく明らかに知れ渡りたり。かく云はゞ敏き讀者は既に推せられたるならん、此の國と云へるは蜂の巢に外ならざることを。其は云ふまでもなく、全世界の中、蟻丘を除けば、蜂の巢の如き多忙に、勤勉に、秩序ある社會あらざれば。

日麗らかに照り渡れる春の末の朝、或は夏の旦、古き林檎の枝に大なる黑き實の下れるが如きものを見るこ

とあるべし。近寄りて熟視すれば、これ蜂の房とも云ふべき群にて、上なるもの丶後足二本は下なるもの丶前足二本と相連なり、かくして二萬或は三萬に餘る蜂、互に抱き合ひて一の塊をなせし也。

暫時して此の群は家を求めんとて木の空洞に入り、家の檐に行き、地の穴に集まり、此處に其の巣を作る爲めの勞作を始むべし。或は若し其の蜜を採らんと欲する人あらば、蜂籠を携へ來り、枝を搖かして此の塊を落し、之を蓄ふことを得べし。

彼等の行くを追ひ、彼等が如何に其の家を作り、如何に其の都を建つるかを窺がひ見む。

勤勉なる小さき虫は五分間ならずして忙がはしく立ち働らき始めたり。二三萬の群の中に雜りて色甚だ黒く、軀甚だ大なるもの二三千あり、此輩は雄蜂或は蜜奴とて、他のもの丶養を受け、彼方此處を彷徨ひて何事をもなさゞれども、多數の勞働者は少しも息まず働くなり。或るものは蜜を求めんとて飛び去る。或るものは其の都を建つる地として定めたる木の空洞、或は地の穴、或は蜂籠――何れにするも同じ、玆には説話の都合を計り蜂籠と定め置かん――の中を飛び廻り、罅隙、破穴のあるやなきやを撿し、之を見出し得たるときは、直ちに粘液を有する花を求めて走り、漆の如きものを吸ひ集め來つて其の罅隙を塞ぐ。


雄蜂

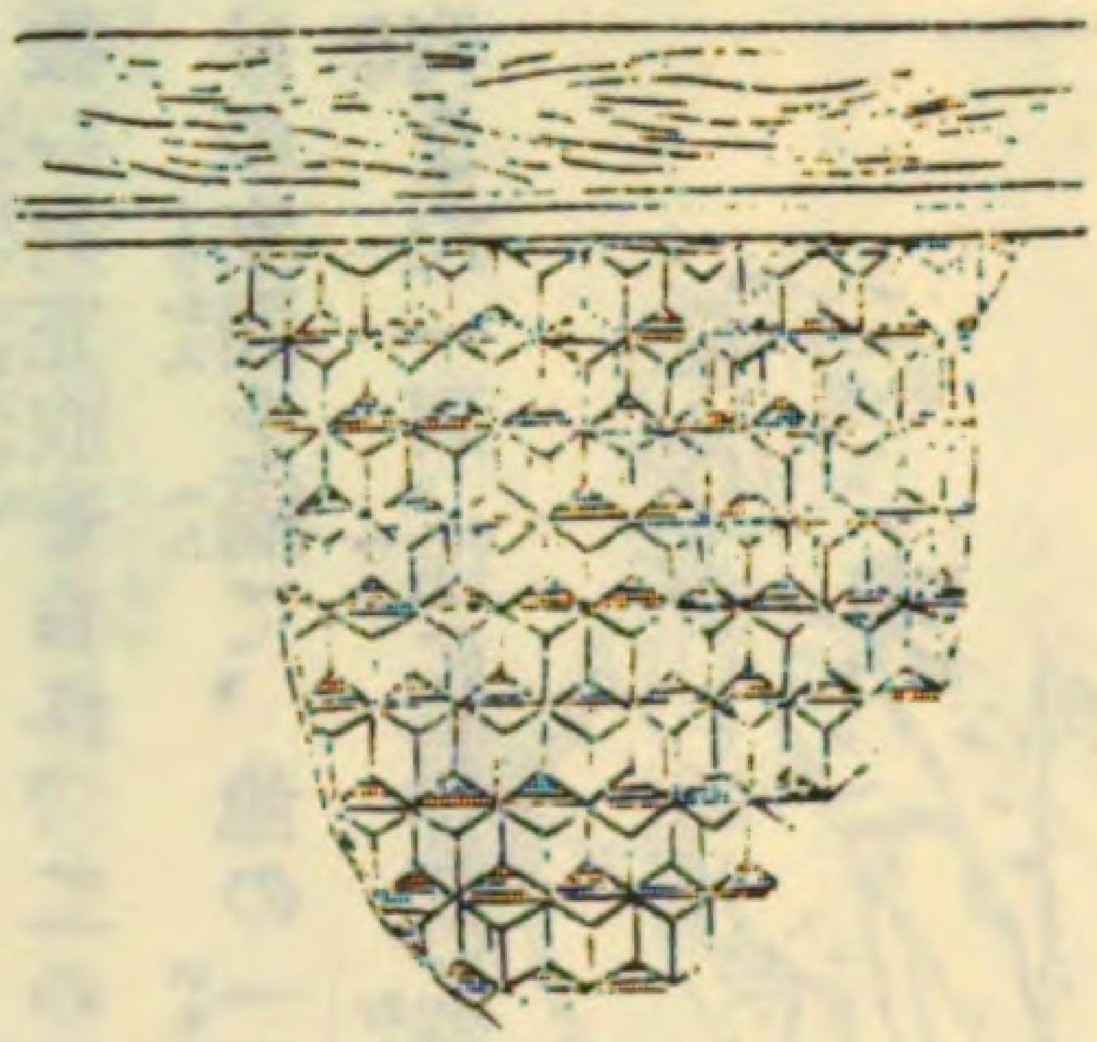

女王


蜜蜂

中に一際すぐれて色黒く、軀長く、羽短かきものあり、多くのもの此の一の周圍に集まりて群をなす、これ此の一群の女王または母として、守護せられ、奉侍せられねばならぬなり。

暫時して多くのものはまた巣の檐となるべき處に集まりて一團となるかと思へば、其の中心に地位を占めたるもの、軀を振り廻し、群を押し退け、少しの空地を

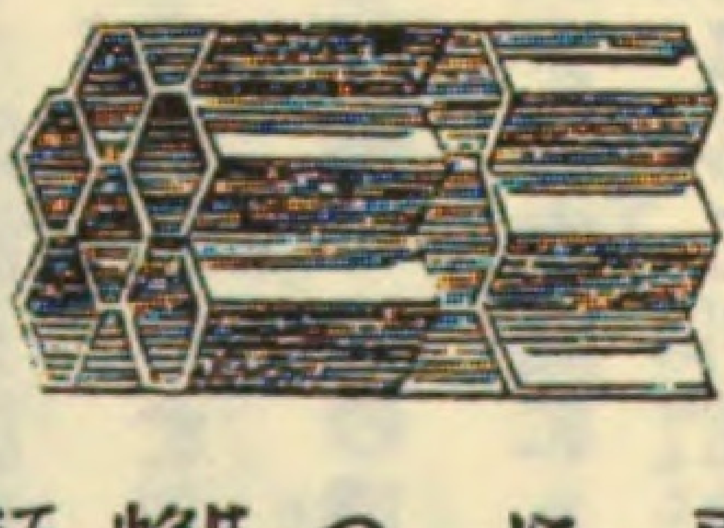
作り、先づ第一の働を始む。彼は先づ、前足を以て其の躰の下部を掻き、下腹にある奇妙なるポケットより蠟の如きものを取り出し、硬く尖りたる口にて之を噛み、舌を出して之を濕ほし、一種の糊を作り、引き延ばして紐の如くにして巣の頂に塗り付く。彼はまた他のポケットを探つて他の紐を作り、八つのポケットに貯はへたる蠟、盡きて其の座を他のものに讓る。



かくて交る〳〵同じことを繰り返し、圖に示す如く巣の房を作る基礎となる蠟の壁の築かる〻に至つて止む。

かゝる間に外に出て〻蜜を集めたる一群歸り來る。彼等は歸り來りたれども、房室未だ作られざれば其の集めたる蜜を貯ふるに處なし、されはとてまた其のポケットには蠟なければ前より内にあつて働らけるものと共に大工の業をなすことも出來ず、此に於て彼等は他の群のある所ろに行きて其の上にとまり、靜かに息むこと二十四時間にして、集め來りたる蜜を消化し、其の一分を蠟となし、皮の重なりて節の如くなれる間より分泌せしめ、建築師の仲間入をなす。

かくて荒方の仕事終り、重ねられたる蠟の壁、適當の大さとなるや、保育蜂と稱せらる〻他の一群來つて其の仕事をなす。一隊は壁の一面に、他の一隊は他の一面に列し、蠟の中に頭を押し入れ、左右に振り動かし、丸き穴を作り、第二の蜂來つて更に之を大にし、殆んど二十以上の蜂交る〳〵其の後を襲きて益々大にし、適當の大さに至つて、其の周圍に壁を築き、間もなく五分計の深さの六角形の穴、少しの空間もなく、前後相接し、左右相連り、蜜を蓄ふべき倉とな



り、卵を置くべき室となる。天然は蜂に敎へて、少しの間隙もなく、少しの蠟を空費せずして、其の巣を作るには六角形に如くなきことを以てせり。

前後一列完成せられ、二の蜂のすれ違ひて通ふを得るだけの空間を隔て、他の一列また之に面して作られ、一列また一列、遂に數萬の群を容るゝ大なる都となる。

（つゞく）

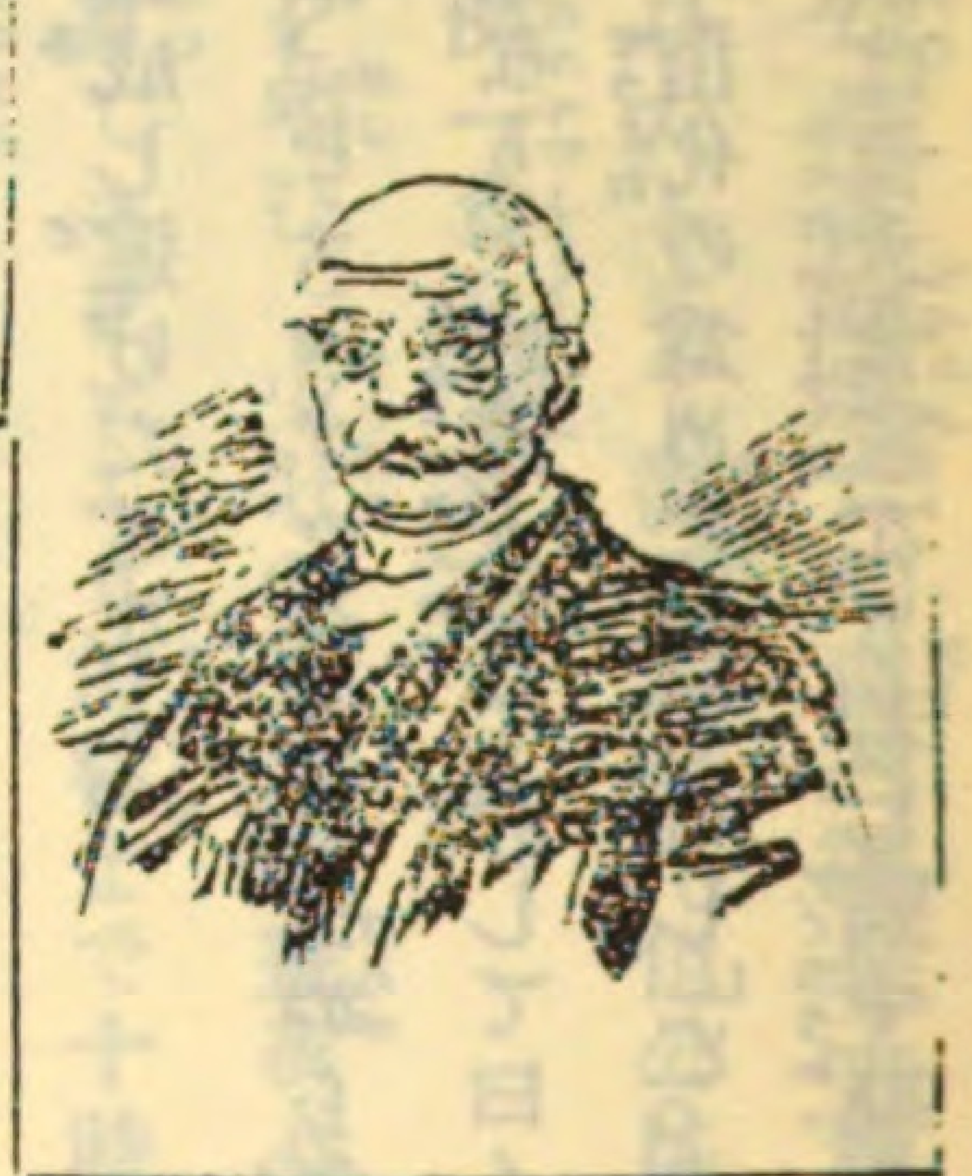
実談

鐵公ビスマアクの家居　上

日耳曼の鐵血翁宰相の位を退きしより已に四年、去る四月一日七十八回の誕辰を迎へて、鬢髮更に雪の如くなりぬ。ブンドリッシルーヘーの閑居日長ふして客の到る稀なり。頭を回らせば燦爛なる獨逸帝國創立の事蹟は已に杳々の昔となり、維廉一世の墓木已に拱してモルトケ將軍の墳も赤苔已に蒸しぬ。あゝ彼老翁豈に今昔の感なきを得むや。來れ讀者よ、イザ共に其閑居を訪ひ、今日の老翁を見て昔日の雄風を忍ばむ。

嘗て歐洲を脚底に踏まへし巨人が今や靜かに殘年を夢み過ごさむとするフレドリッシルーヘーの林墅は、もと維廉一世の贈與にかゝり、位置は恰も伯林とハムブルグの中間にありて停車塲を距る遠からずと雖も、靜閑にして別乾坤の趣あり。家は繞らすに不規則なる赤煉瓦の垣を以てし、門を入れば欝然たる大木庭内に森立し、砂と鋸屑を一ぱいに敷つめし道を辿りて猶行けば、眼前に聳へ立つたる家は先づ其結搆の單純質素なるに驚く。家に入れば壁も天井も只一面に白く塗りて、壁紙を張らず、粧飾を施さず。大きやかなる戶を排して入れば、小さき玄關室にて、一方に更衣室あり、一方に侍者室あり。更に進めば大なる室あり、斯家中尤も粧飾を施せる一小室に通ず。此小室こそ鐵公が昔し常に客を延見せるの室にて、先づ眼につくは室內に

掲げられたるビーコンスフイルド伯の畫像、下に題する伯の名字はビスマアクの筆なり。伯の像と相對して佛國チエール氏の



老年の鐵公



少年のビスマアク

像かゝれり。一方の隅には青銅製のモルトケの半身像、月桂の冠の下に埋もれて僅かに半面を露はせり。室内またライフル充滿せる箇、書架地圖、二個の椅子、一脚の小卓子を据ふ。此接見室の一方の戸を排けば即ち鐵公私用の各間にて、其の第一たる書齋は極めて廣濶、マホガニー卓子數箇を置き、南の方を見はらす窓側に巨大なる文臺を据へ、青銅の墨壺、紙、鵞ペン等を整置せり。窓の一側隅に維廉一世の畫像あり。室の他の一端、窓より光のさし來らたる所には、數個の臥床あり腕かけ椅子あり。ビスマアク常に此椅子に倚て、煙管口に啣へながら深慮熟考す。此室の壁にはビスマアク夫人及一家子女の畫像をかゝげたり。薄暗き一隅に小さき骨牌卓子あり。此れ千八百七十一年二月二十六日曼佛の間に平和條約の調印せられたる卓子にして、ビスマアクが普佛戰爭より携へ歸れる所なり。次はビスマアク公の寢室、また是れ質素の尤も質素なるもの。此家の中然る可く粧飾を施せるは、唯客人の用に供せらるゝ室のみにて、此處には幾多の名相名士睡れり。食堂には三十の賓客を坐せしむ可し。家の摸樣概畧右の如く、屋後の露臺に上れば廣濶たる牧場緑肥へて草煙の如く、鬱たる森林遙に之を繞る。

鐵公身材六呎二吋、重量は昔し尤も重かりし頃は二十八貫に近かりき。コロスサスの頭の如き頸は、巨柱の如き頸によりて牡牛の如き躰に接し、音吐鐘の如く、双腕鐵の如く、昔しモルトケ將軍と共に朝にありし時は、其名を聞いて其人を知らざる人よりして往々モルトケ將軍と取り違へられしとあり。蓋し武勳赫々威風歐洲に振へるモルトケ將軍は鬚髯奇麗に剃りし瘠軀屈身の人にして、文勳を以て名あるビスマアク其人は却て希臘古代の英雄神とも云ふ可き武人的躰格なりしが故なり。此の躰格ありてこそ彼の幾人を殺了しても猶成る能はざる大事業は成し遂げたるなり。

斯くの如き躰格なれば、ビスマアク公は自づから無比の大食家痛飲家喫煙家なり。或佛人曾て評して曰く、彼巨漢若し死せば大不消化の爲めに死す可し」と。公も亦自ら曰く、余が家族は皆大食家なり若し國中斯る大食家多からば國家は立ち行く能はざる可し余は移住せざる能はざる可し」と。亦曰く、若し余に仕事を爲しめんとなれば、よく食物を與へざる可からず余若し適當なる飮食物を得ざれば余は安んずる能はず此れ余が報酬の一部なり」と。公甚だ石の如く煮熟したる雞卵を好む。曾て謂て曰く、昔しは十一個位は容易に食したれ共今は僅かに三個位に過ぎず」と。普佛戰爭中食乏しくして一同大に困窮せる時、公獨り農家を見出して食を命ぜしに、唯雞卵のみある由を答へければ、公は即ち雞卵五十個を打破つて一大オムレツを造らしめ、片時の間に食し盡したることあり。公壯年の日夫人に書き送れる書



ビスマアクの閑居

中に左の一節を載せて曰く、唯今一寸一杯茶を喫し申候但茶と申すも實は珈琲幾盞雞卵六個肉三種果子幾箇ボルドオ一瓶之に附添ひたるにて御坐候」と。但公は非常の大食家なれ共、通例一食を常とする也。

公今日も猶非常に喫煙を嗜む。少壯の日には晝夜パイプを手離すことなく、曾てコロンより伯林まで十時間の鐵道旅行中間斷なく喫煙せしことあり。佛のガムベッタ曾て一友と日耳曼の大敵を語る。ガムベッタ喟然嘆じて曰く、「幸福なる人よ麥酒と煙草は能く彼に應ず」と。若し夫れ痛飲の一事に到ては、元來痛飲國民たる日耳曼人も猶鐵公の大酒を嘖々し、一氣に一瓶を鯨飲し人と賭して幾週間に渉る醉を來せる程痛飲せること幾度なるを知らず。曾て曰く、「余は昔しは吾飲酒の量を慮らざる時ありし」と。某友人と五六時間が間に一百六十頭の兎を射て、然る後モルトケ將軍新釀の酒に沈醉せる事など猶今日に喧傳す。ウオルソウ府に住する日耳曼人幾名鐵公は葡萄酒と麥酒と何れを多く飲むかの件に付き一百ルーブルを賭し、公に其事を通報したるに、公の秘書官は答書して曰く、閣下の仰により御返答に及び候、御兩所何れも勝敗無之候、閣下は葡萄酒も麥酒も共に一樣の御好にて、病氣の時の外は一日として兩者を召されざる日は無御坐候」と。

文藝

歌方姫

嵯峨のや主人



第一章

よしわが力よはくとも、
討でやは父の讐。

もしながらへてましまさば、
　救はでやは我父。
かよわくこそあれ此腕、
　悪路が頸をひきまきて、
　　おのれ！　横腹、唯一抉。
あゝさりながら前途千里、
　道遠し、道いと遠し！
　　今宵何處に宿りなん？
日は西山の陰に落て、
　雲に聳ゆる奈須嶽、
　　山ふところより暮初ぬ。
見渡せば百里一目の大野原！
　其果何處ぞ天の月？
　　茫々として千萱しげる。
寒や衣をかへす秋の風、
　蕭々として鬢を吹く。
あゝ此處いづこ奈須の篠原！

草間に横ふ白骨は、
　幾世の雨にや打れけん、
　　月に恨を訴ふる。
霜をば結ぶ刄の折、
　如何なる罪をや造りけん、
　　蓬の根方に横はる。
あれ呦々と鳴く鹿の音は、
　妻を戀てや夜を傷む。
あれきゝとして叫ぶ聲、
　何を恨みて猿猴なく。
寂しきものは秋の野なり。
　近きあたりに里もなからん、
野守の神の社なりと、
　ありなば其處に夢な結ばん。
のびあがりのびあがれども、
見ゆるは千萱天の月、

　星のごとなる影さへなし。

〰〰〰〰〰〰

往き〳〵て天河斜に傾く頃、
　野中を流るゝ一筋の、
　河の邊に出にけり。
船やある？河の上下眺むれども、
　一艘もなし。
水や淺き？月影に照らせども、
　底は見えず。
芦の根を洗ふ水音凄く、
荻の葉を吹木枯寒し。
如何にせん？
　翼なければ飛び難し。
今宵は袖を片敷て、
　萱の根枕野を守らん歟？
いやとよ河風寒ければ、
野原は猛獸多ければ、
　身を損はるゝ事あらん。
望ある身は大事ぞや。
　岸邊に添ふて下りゆけば、
　杉の一村しげる中に、
　星の光歟螢火歟？
　火影ちら〳〵木の間に瞬く。
嬉しや、八幡氏の御神！

〰〰〰〰〰〰

小笹の露をふみ分て、
　近よれば萱が軒端の古たる祠。
　如何なる神を歟まつりにし？
軒洩る月に照さして、
　仰ぎ見れば木彫の額に墨きへ〳〵、
　水神の社と讀まれける。
祠に登て歸命頂禮。
　祈るは武運、父の身の上。
折しも何の音ぞ葦の葉の戰ぐは？

木枯や吹く?
猛獣や來る?
ふり返り見れば彼は何者?
大の男七八人、
スックと祠前に突立り。
あゝ哀れ乙女の胸には、
荒磯の波やよせぬらん。

（つゞく）

活ける鏡

蔽日生

われ月ならば花ならば
かれ水ならば風ならば
澄みもわたりて照る時に
摧けて映つるものならば
ゑみもこぼれてにほふ日に
みだれて散らむものならば
映つす水こそうらみなれ
散らす風こそうらみなれ

われ月ならず花ならず
かれ水ならず風ならず
圓滿にもあらぬ心もて
いろも香もなき形もて
漣漪たつとかこつなり
嵐ぞ吹くとなげくなり
月にもあらぬわが心
花にもあらぬわが形

婦もつ人は婦を泣き
侶もつ人は侶を泣く
「かれ樂しまず歡こばず
笑まず語らず慰さまず
憂きこと多くつれもなし
われ歡こばずたのしまず
出でねばましかは此の浮世
ひとりのむかし戀しけれ」
婦は夫の鏡なり

侶はわれらの鏡なり
夫うたへば婦は彈き
われ歎こべば侶は笑む
こゝろよき事こゝになせば
こゝろよき狀彼處にうつる
夫は婦に心を映つし
われらは侶に影映つす
活ける鏡に瑕瑾もなく
活ける鏡に點汚もなし
もし月ならば花ならば
動かず吹かず音たてず
くまなく照らす心をば
ゆかしくにほふ形をば
活ける心のそのまゝに
活ける形のそのまゝに
活ける眞の心あらば
活ける眞の形あらば
この國のため民の爲め
後の世のため千代の爲め
則をばのこせ型のこせ
譽れをのこせ名を遺せ
活ける鏡を見る心
活ける鏡を見る形



ルエリンの愛犬

スペンサー作
家永にい子譯

一、喇叭の聲と　諸共に
朝日うらゝに　さし出つ
呼ぶルエリンが　角笛の
おとに連れてぞ　獵犬の

雌雄の數々　集れる

二、なほ吹やまぬ　ルエリンは
いよいよつよき　音させつ
來よゲラルトよ　いかなれば
汝はルエリンが　角笛の
おとに後れて　來るぞよ

三、いとも忠義に　かり犬の
うちにも花の　ゲラルトは
そも何處をば　さまよふぞ
いと信實に　勇氣あり
柔和なからも　いと猛し

四、心ならずも　ルエリンは
獵に一日を　暮らしゝが
今日ゲラルトの　ゐぬゆへに
獲物もいとゞ　寡くて
勇まぬ樣に　かへり來ぬ

五、家路に急ぐ　ルエリンは
やがて門にぞ　來りける
その時早く　ゲラルトは
まちえがほにも　とびいでゝ
主君のかへり　迎へけり

六、城の戸近く　なりし時
ゲラルト見てぞ　ルエリンは
打駭きて　立ちにける
そはこの犬の　唇も
牙も血しほに　染みてけり

七、かゝる光景　みなれぬは
驚かでやは　ルエリンは
やがてゲラルト　嬉しげの
さまをかへてぞ　打曲み

主君の足を　踝にけり

八、いそぎて入れば　ゲラルトも
主君のあとに　つきゆけり
中に入る〳〵　觀廻はせは
乾きもあへぬ　血しほこそ
こゝやかしこを　そめにけれ

九、我子の臥床　覆へり
掩へる衣も　きれ〴〵に
あたりの壁も　床さへも
まだあたらしき　血の痕の
滴るばかり　見えにけり

十、我子をよべど　聲もなし
くるへるさまに　尋ねても
赤子は何處　見えもせで
たゞ見るものは　血しほなり
血しほの外に　何もなし

十一、にくき獸め　汝がために
わが子はかくも　喰れたり
思ひ知れよや　ゲラルトと
つかもとほれと　脇腹に
むくいの刄　差込めり

十二、あはれや犬は　地に伏して
命乞ひをば　したりしが
などて願ひの　適ふべき
さはれこの時　ゲラルトの
最期の聲は　ルエリンに
いともかなしく　きこえけり

十三、犬がいまはの　なき聲に
眠れる稚子は　めをさまし
かたへにちかく　泣き出でぬ

この時父の　悦びは
いかばかりぞや　よろこびは

十四、心急くまゝ　重なりし
衣にかくれし　稚子を
見いだしかねて　ありにしが
今はねふりを　打さまし
いとゝかあゆき　我子をば
抱き揚げてそ　キスしける

十五、傷の痕さへ　あらばこそ
安けき乳子に　ひきかへて
おなじ臥床の　そのしたに
いとおそろしき　狼の
引き裂れてぞ　ありにける

十六、この様見たる　ルエリンが
心の嘆きや　如何ならん

犬は我子を　助けんと
かく物凄き　狼を
殺しゝことぞ　いとおしき

十七、いとはかなしや　ルエリンが
その繰言も　水の泡
又と得難き　獵犬を
速り心に　伐ち捨し
嘆きはいつしか　わすられん

十八、せめては愛でし　ゲラルトの
その亡骸を　いつきてと
高き塚をば　築き上げ
大理石もて　打飾り
その功をぞ　表しける

十九、傍を過ぎる　山人も
戟とる人も　これを見て

あはれをしらぬ　ものぞなき
來つゝ吊ふ　ルエリンが
淚は草葉の　露と見き

二十、常もち馴れし　角笛と
錆さへこゝに　かけおきぬ
物さびしげの　夕暮は
亡きゲラルトの　殘しにし
最期の聲の　きこえけり

貴ふして驕らず（斷翰）

昔貞正院と申候は或大名に宮仕まゐらせ候女にて、其腹に一人の男子を出生致し、やがて小さき館をしつらい之に住ませ申候。爰に大國の主將卒去し其跡續ぐべきものこれなかりしに、此の大名とは深き因有ければ、彼を申請度よし言入候。然るに不行跡なる育立故、大國の主將と成候事如何なるべきと御辭退申候を、達ての申入に付漸く承知致候處日を撰みて迎へ取申候。扨當日は供廻りなど定めて美々しからんと皆人思ひ居沙汰いたし候に、曾て左樣の景色候はず、斯くて此君大國の主となられ候ても、平日召給ふ衣服も木綿のみにて、只管政道をのみ勵れ申候、隔日には役人を召して政務を談じ、月頃の用日には大書院に出座し、公事訴訟を聞かれ候ひしが、其場にて辨當など召させ役人も同座にて食し申事に御座候。始めて出座有し時は晝飯時分に成候處、大守曰、ちつとも苦しからじ、君臣心易き事寢食を俱にすると承りぬ、遠慮なき間打くつろぎ我と共に給られ申べしと有しを、達て辭し申と雖聞入給はざる故止事を得ず大守の前にて皆々辨當を開申候。何れも佳肴珍味充滿なり。太守の辨當は食籠に入て、香物燒味噌のみに御座候。何れも大に痛入額に汗を流し面を上得ず候處、太守是を見て、誰某は結構なる菜の物を設たり、箸をかへして我等にもちと分ち候へと戲れたまふに、座中大に迷惑致し、是より段々辨當の奢もやみ候との事に候。又御實母への御孝心はいふも更なる事に候へども、母公は曾て大國の屋敷へ來給ふ

事無之候。是に依て老臣共評議致し、知行千石を進じ大國の屋敷へ引取可申との事に候處、母公の申さるゝは、志は嬉しけれども、太守の爲を思はれ候はゞ必無用に致さるべく候、其子細は、妾は輕き者の娘にて先君の寵を得男子を設候事身に餘りて勿躰なく候、其上我子大國の家督を繼ぎ大國の主と成候は冥加そらおそろしく候、然るを今彼屋敷へ參り素性拙き老姥が一所に住て有らば太守もおのづから心ざし野鄙に落入り一家中一國の爲にもなり申すまじく候へば、只此儘に差置候へ、又千石の知行過分に候、妾は當家にありて衣食共乏しき事曾て無之候へば、其千石はわかちて日頃忠勤のものへ加增し給はゞいか程歡び候半」となり、老臣等皆々感涙を流し申候。其後母公一度大國の屋敷へ來臨したまふ事有之、始ての入來なれば馳走殊に甚しく、門前へ盛砂飾手桶など出して有候ひしに、母公は屋敷の門前迄駕籠に乘給ひしが門前にて下乘し、女中二三人供に召連れ裾小短にかゝげて門番の下坐して居けるを丁寧に腰をかゞめて通られ候。屋敷內にても母公に逢ひ候侍中餘りに輕々敷ゆゑ殿の母公とは存ぜずして皆々行過き候との事に候。扨殿の前へ出させたまひ候も禮儀を正し、太守より彼是御挨拶有て上坐へ勸め候と雖、いやいや勿躰なしとて進みたまはざりしとの事。いかさま斯る女なればこそ、斯る明主を生みたりと知られ申候。

〔首尾壞裂何人の書なるを知らず〕

家政

如何にして夏を過ごさんか

夏は萬の事に注意すべし、然らずんば一年の養生にて得たる健康を、二ヶ月の夏にて破るに至るべければ、ゆめゆめ注意を怠るべからず。



第一は食物なり、食物の注意とて、高價を出して養

生せよと云ふにあらず、唯だ夏の衛生に適するものを撰ぶべしと云ふのみ。或る人は中等の生活にて左程の餘裕ありしにあらざれども、昨年友に誘はれて海水浴に行きしに、魚類の多きにまかせて、一ヶ月間魚類のみを食ふたるがため、一種の胃病を得て歸りき。此かる事は愚なる事にして、夏は最も淡白なるもの、野菜類を食ふべく作られてあれば、廉價の生活をなし得るなり。料理好みにて名高きエステルハジー公の料理人が、最も美にして消化よき食物を命ぜられしとき、一片の牛肉を三種の食品に作りかへて、出せしと云ふが如きは、最も料理法に適したりと云ふべし。

或る人は夏は冷肉こそよけれとて、之をのみ好むものあれども、之にかぎりたるものにあらず。冷肉にカレー(ライスカレーに使用する辛味ある粉)を散布し、且つ少しく暖めたる肉こそ最も消化よく、最も滋養あるべけれ、

或る人はまた、夏は冷水にかぎるとて、食前、食中、食後に冷水を飲み、または冷茶を飲むものあれども、そは一時口頭に快よきのみにして、胃には却つて効なし、温茶温湯は胃を暖めて、其消化の働を助くるものなれど、之を冷やすものは、消化をさまたぐるものと知るべし。その證據には、水を飲みたる後は、消化あまりよろしからぬものなり、故に氷水の如きも、なるべくは用ひざるを可とす。

夏は熱しとて夜半頃迄、起て雜談し、さて翌朝は九時十時頃まで寢ぬる家族あり。是れ決してよき事にあらず。第一夏は日中熱くして、何事も眞面目に爲し得られざれば、大抵の事は早朝と夕方とになされざるべからず。然るに肝要なる早朝を床の中にくらすは、經濟上の損失にして、此かる家族は多くはなまけものと知るべし。第二、夜深まで雜談するは必らず之に伴ふて茶を喫し、水を飲み、若しくは菓子を食ふを免れず。夜九時過の飲食は胃を害すること甚だ大なるのみならず、夜深の空氣は濕潤にして、身體機關によろしからず。之がために健康を損すべし。故に心ある人は、朝は五時に起き、夜は九時を限として寢ぬべし。殊に多

くの不道德は、夏時の夜遊より來れば、家の主人たるものよく〳〵注意すべき事なり。

夏は温泉に浴し海水に浴することは、近來の流行となれり。されども之と共に、多く不節制、淫逸の風を伴ふに至りしは嘆くべきことなり。夏時の休息は必ずしも温泉海水に限ることかは。病人ならばいざしらず、健康にして唯だ休息を得んとするには、田野に退きて休息するも可也。山間旅行を企つるも可也。唯た平生より思慮を轉ずることこそ肝要なれ。而して家長たるもの、必らず之に伴ふて快樂し、假にも之と伴ふ惡風に染まざるの用意こそ肝要なれ。

束髪

去る明治十九年頃其當時都鄙の區別なく到る處に非常に歡迎せられ、其の利益便宜をたゝへられ大なる勢力を以て流行したりし束髪は、三四年前より漸々其數を減し、今やたゞ僅に敎會若くは女學校に於て其跡を見るまでに至りたり。然れども時間と費用との經濟上女衛生上勞力及び心身の快樂を保たん事を欲せば、是非束髪をして前日の樣に立ち返らしめ度き者なり。試に見られよ。



第一、費用の經濟上に於て、島田髷、丸髷、銀杏返し等を結ばんか、此等は皆女髪結の手を假りて結び、髪結は家に依りて異なれども、三日に一度、五日に一度、若くば一週間に一度、甚しきは毎日來るもあるべし。今假りに五日一度之を結ふとして一度金五錢を要すとせば、一ヶ月に髪結料のみにて金三十錢要すべし。而して之に要する油、元結、櫛、簪に根掛に費す處の金は少からず。大抵平均月に三四十錢位合せて七八十錢位を要するなり。又唯是が爲に費す費用に止まらず

衣服汚れも夥し。然るに束髪なれば他人の手を借らずして結び得るのみならず、其費へも之が十分の一程にて足りぬべし。

第二、時間の經濟上にも非常の利益あり。即ち島田髷なれば一度結ぶにも少くも一時間半、丸髷なれば一時間を要し冬の短き日などには髪を結ぶ爲めに大方半日を費すは常なるが、束髪ならんには十分間もあらば充分にして日に一回づゝ結びても月に費す所の時間は島田髷の要する時間の半ばにて足れり。

第三、衛生上に於ても同樣にて、島田髷丸髷等は澤山の油を塗りつけ、爲に氣孔を塞ぎ、充血を來し、頭痛を生ぜしむる事あり、殊に夏期は頭中より蒸發する氣と油と混じて言ふ可からざる臭氣を發し、接する人をして快よからざらしむる事さへあり、然るに束髪は之に反して頭痛を防ぎ、之を洗はんにも容易なれば、從て身躰に大なる利益あるべし。

第四、勞力及び身心の愉快を保つ上に付ても束髪を利益なりとす。島田髷等ならば一度結ぶにも少なからざる勞力を要し、叉櫛簪等を戴き其の重みにても少なからぬ難義を感じ、坐作進退自由ならざれども束髪は結ぶに要する時間の短き丈け勞力も少なく、輕くして至て心地宜く、從て何事をなすにも爽快なるべし。殊に夜間臥す時などは最も便利なり。

束髪の便利なるは右に擧げたる個條のみならず、之を明細に記さば猶多くあるべし。殊更に女髪結の人家に出入するため、世にいまはしき噂を惹き起し、清き最も大切なる家庭を紊すが如き例、昔より少なからず。されば、清き樂しき家庭を作るに當り最も有害なるものなり。

而して束髪の結び方に至りては、種々あれども當時はフランス捲き及びアゲ捲等のみ人々に結ばるゝなり。アゲ捲は十五歳位の女子にも又或は三十歳内外の婦人にも適するなり。フランス捲きは恰も銀杏返しの如き形にて、頭上に結び俗に所謂目鏡と稱し、最も高等なる髷にして、白衿、紋付等を着せる時、之を結び、最も似合はしきものなり。

最も簡便なる海水浴



必ずしも高金を費やして海水に浴せずとも、靜かなる住居の一室に於て、海水浴を爲すの法あり。そは食鹽の冷水浴を行ふにあるなり。夏時夏いたみと稱して、身躰の疲勞して、不快怠慢を感ずる人も、此法により大に快よきを得べし。其方法は先づコップ一杯計りの食鹽を盥の中に入れ、熱湯少許を入れて能く溶解せしめ、後盥一ぱいに冷水をそゝぎ、毎早朝之に浴すべし。たゞし食鹽の溶解あしきか、又は食鹽にして鑛物の多くあるときは人躰の氣孔に殘りて、蒸發氣を閉塞すべければ食鹽の善良なるを撰むと、熱湯中に能く溶解せしむるとは、最も注意すべき事なりとす。夏は淡泊なる食物を命じて、廣野に活潑する運動をなす事が、最も大切なる養生法なる如く早朝の食鹽冷水浴も、一種欠くべからざる强壯劑たるなり。强壯なる人の冷水浴は、海水に劣らぬ功能あれども、小兒又は病躰の如き虛弱のものには、少しく溫湯となすを要す、又病氣の性質によりては、八十度乃至八十五度位の溫湯となして功あるものあれども、そは醫者に聞き後になすべし。凡て溫浴は快活となるの益はあれど、强壯劑としての功はあらず。殊に注意すべきは浴後燥きたる手拭を以て、能く水氣を拭き取り、且つ成るべく手足を摩擦するをよしとす。かくして止めざれば、寒中にいたりていかなる强風に遇ふも、寒を引かず。又皮膚病の如き不潔より發する病氣は、凡て近づくを得ざるべし。東京等の如き假り住ひ多き土地にて、風呂場のなき家には、一の簡便なる方法あり。即ち海綿浴之なり。之は唐物屋にて海綿を需め、金盥にチヨク一ぱい位の食鹽を入れ、よく〳〵溶解し、右の海綿を其の中にて緩く絞り、四體を拭ひ再三絞り更へて、四體を拭ひ、更ゆる時は、鹽水浴を爲したると同じ功能あり。且つ一の海綿にて爲し得ることなれば、轉居等に運送自由にして便利少なからず。

生活に餘裕なき人にても、爲し得べく、旅行先にても爲し得べく、山の奥にても爲し得べく、雨天にても爲し得べく、而して其効能は山なす波の打ちよする大洋に浴すると同一なれば、此ゝる方法の一般に普通せんこそ願はしけれ。

調理談

丸焼茄子

金仙



今は茄子の時節となれり、料理の法宜しきときは、一山百文の茄子も、上等の食膳に供するを得べし。丸焼と稱する法あり、茄子の若きものを取り、洗ひて皮を去り、濡れ紙を以て其茄子を包み、熱灰の中に入れて蒸し焼きとし、焼けたる茄子を指にて引きさき、糸の如くなし、之に蓼酢、若しくは三杯酢を掛けて用ゆべし、又皮のまゝ蒸すも可なり。

ウソ煮

焼魚等の付け合せものとして、最も美味なるは茄子のウソ煮なり。此煮方は茄子の若きものを半分に割り、中を操り抜き、その中へ牛肉若しくは魚肉を詰め、再び元の如くに合せ、上より干瓢にて縛り、醤油の汁にて煮、丸きまゝにて付け合せものとするなり。

ゴマ煮

ゴマ煮は茄子料理の中、最も淡泊にして香ばしき料理なり。先づゴマを擂鉢にて能く擂つぶし、擂つぶれたる胡麻を醤油にて解かし、少量の砂糖と水を加へ、その汁にて茄子を煮るなり。或る人は先づ茄子を油にていためて胡麻醤油にて煮るものもあり。

鳳梨

西洋物を賣る八百屋に、松かさにたる果物あり。これパインアップルなり。パインアップルは林檎の味ひにして、梨、いちごの美味を加へし如きものにして、

此の頃の時候のものなり。今其食用法の一二を記さんに。

鳳梨煎餅

と稱する料理法あり。今うどん粉を糊の濃に練り、一二個の卵の黄味を混じ、さぢ一杯計りのバタ、及び同量の水を加へ、最後に卵の白味を加へて、半日か一日かそのまゝにてをき、別に鳳梨を薄く切り、心と皮とを去りて、砂糖をかけをけば、之より甘味なる汁液出づべし。その汁を先きのうどん粉を解したる中に入れ、鍋に油を引きて、五分位燒き、狐色となるを待ちて、皿にうつし、少しく白砂糖をかけて用ゆべし。

また

二三個の卵にコップ半杯位の砂糖を、望によりレモンの汁少量を加へ、サヂにてよく／＼かきまぜて泡たゝしめ、之に水にて溶解せるうどん粉をコップ二杯ばかり加へ、更らに少量のバタ若しくは乳とサヂ一杯計りのソーダとを加へ、更らに水を入れ、能く混和し、恰かも通常のうどんの出來る位のものとし、之を板の上にのべ、小片に切り、金網若しくは燒鍋にて極く／＼緩なる火にて燒くべし。その燒くに當りて、パインアプルの小片を此の果子の上に所々に散らして、或は花の如く、或は月の如くして、所謂果子の目を作るときは、即ちパインアプルケーキとなるなり。之は鳳梨のみにかぎらず、いちご、梨、桃、葡萄、何にても目を作るを得べし。

之にても已に美味なれど、客に出さんには、更らに卵子の白味を泡だゝせ、之にレモンの汁と二三サヂの砂糖を加へしものを、燒きたる菓子の上に塗りて、用ゆれば一層の美味を增すべし。

手藝案内

麥藁細工

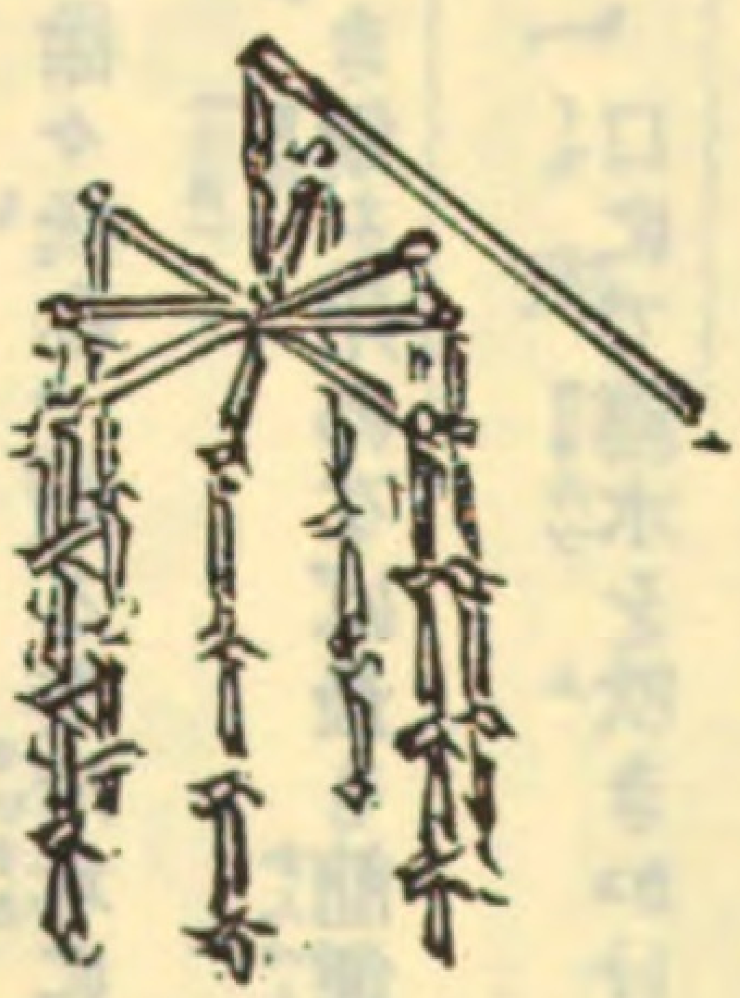
麥藁細工の案内を記さむ、

麥藁細工は九州にては七八歳より十四五歳迄の小兒が手遊の爲め新麥藁を以て鳥、馬、着巾、籠等の種々の

細工を爲す、其作巧ならずと申せど一種の風韻あり、而して東京に於ても麥藁の細工種々に行はれ、夏帽子等もおさ〳〵舶來品に讓らず、頗る精巧の品を製造するに至る、殊に東京地方の麥稈は惣て品質宜しく、年々帽子製造の原料として外國へ輸出せられ、再び精巧の帽子となりて日本に歸り來るを我國人は高き代價を拂ひて之を需用する道理なれば、日本人は好き麥藁の材料を有しつゝ、却つて外國人にムザ〳〵利益せらるゝと知るべし、併し我國にても近年は舶來品に劣らぬ製品を出す、

何事も始の間は巧ならずと雖も、練習するに從ひて追〳〵と熟達すべし、麥藁細工も最初は不恰好なるべけれども、追々と上達するに從ひ、小兒の帽子位は造作なく製造し得らるべし、

今玆に細工の概略を記せば、第一に必要の道具は小形の鋏刀(これは麥藁を切る)普通の針(糸繫ぎに用うる)小形の竹篦(麥藁を割き又は糊附を爲すため、但し麥藁を割く事は鋏刀の頭にても宜し)にして、帽子を製するには別に帽子形の原毫を要すれども、右三個の道具にて大概の細工を出來得ると知り玉へ、而して用料麥藁は麥幹の穗頭なる薄き光澤ある茶褐色の纖維質の處を擇び、之を純白ならしめん爲めに、腐水に浸し置き段々と清水に移せば茶褐色の消滅し去る(又は亞硫酸に浸して漂白する別法あり)、巳に純白の麥藁を得れば之にて製作に取かゝる、但し麥藁は隨分脆き性質を有すれば濕氣を有せしめて柔軟なる間に使用すべし、さて製作の順序は絲をもて麥藁を繫ぎて下圖の如き玩具を造り(但し邊端の玉は豌豆を用ゆ)、又は麥藁を以て結び合せて種々なる形を設く、其中井桁や菱形や蝶形やこぼれ松葉は最も容易の業なり、




蝶形


松葉形

織方にも種々あれども、大概は彩色の厚紙と織り混ぜ

て一枚物となし、裝飾品と爲す、而して業の熟練するに從ひ、麥藁のみをもて見事に扁額等の美術品を製作し得る、又貼付摸樣も隨分面白き細工にて、麥藁を適宜に截り、糊にて布帛の上に貼付くるなり、これも種類數多あれども五字繋ぎ麻の葉等は最も易き業なり、麥藁帽子は最も六かしき製作なれども、少しく熟達すれば小兒の帽子位は何でもなかるべし、而して其組方は



三ツ打　くみつけ

右は三ツ打の組方にて、五ツ打七ツ打等あれど其製法は大抵同樣と知り玉へ、

此細工に需用あるは綿布絹布なり、これは是非とも供へ置くべし、麥藁を色々に染めんとならば、赤には西洋紅を用ゐ、黃には「エルロー」、紫には紫粉（共に生藥屋にあり）を用ゐ、ブリキの箱の中にて文火をもて煖むれば望の色自在なり、但し色止は燒きたる明礬第一なり、

しみぬき法

絹布又は木綿の衣類に菓物の汁や醬油の汚染のかゝりたる時は、其部分を桶の上に置き、上より熱湯を濺ぎかくれば直ぐに汚點は落ちるなり、又酒のかゝりし時は灰を懸け能く乾きたるを待ちて「ブラシ」にて拂ふなり、又石油のかゝりし時は遠火にて乾すを好しとす、

衣服に油のつきたる時は大根擦を油のつきたる部分へつけ置き、而る後熱湯をそゝぎかくれば落ちること妙なり、又一法に海蘿を載せ、徐々揉み、而る後清水にて洗ふ、

垢の附きたる襟などには軟き餅を用ゐなば最も簡便の良法なり、

血汁等の爲に汚されたるには、口にて霧水を吹きかけ或は「シヤボン」にて洗ふ、

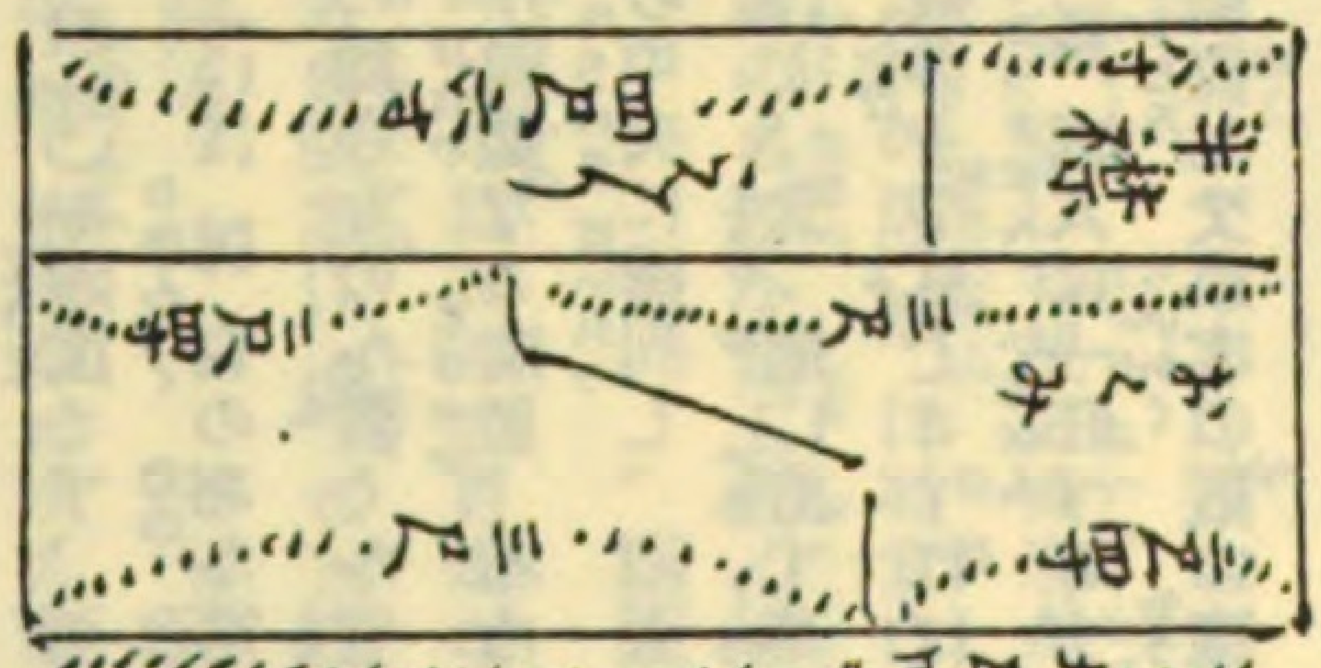
白き絹布綿布等に墨汁のつきたる時は未だ乾かぬ中に飯粒をなすり附くべし、

同じく疊等に墨汁のつきたる時は、水氣ある布にて拭へば益々黑染みるが故に墨のつきたるまゝに置き充分乾けるを待ちて藁片にて其部分を摩擦するは面白き妙

法なり、
同じく板等に墨汁の汚されたるには塩を指にて其部分にこすりつけべし、煙草の脂には生味噌、汗には清水にて洗ふ、ペンキには石炭油に濕したる布にて拭ひ取る、

　二丈六尺の布をもて

上總木綿の丈なしと申せども敢て此の反物のみに限らず、價安き浴衣地の如きは往々尺の不足なるものあり、二丈八尺が通例なれども二丈七尺より甚だしきは二丈六尺なるものあり、是等は身長の短き人には別に差支なきも通例の人には甚だ迷惑千萬、併し其截方に依りては隨分間に合ふなり、今通常人(男物丈三尺六寸)の單衣の裁方を記せば、袖三尺宛合せて六尺身ごろ三尺六寸縫代五分四枚にて合計一丈四尺六寸、袖の分とを〆れば二丈〇六寸となる、之を二丈六尺の反物より裁ち去れば五尺四寸を剩す、此殘餘の分にておくみ、襟及半襟を取らねばならぬ、其裁方は圖の如くおくみは鍵方に裁ち三尺の處をもて身につけねばならぬゆゑ、若し反物片面物なれば一のおくみは裏を出さねばならず、此故に反物は兩面物を要す(勿論片面物は縮、絞及普通の木綿物にはなし、重に小紋形等に之れあり)、少し短き嫌あれども襟は四尺六寸半襟は八寸にて間に合はすべし、



社交一斑

西洋禮式一斑(承前)

洋癖子

食禮

本邦人にして未だ西洋の禮式に嫻はざる人は宴席等に臨みて[illegible]分迷惑する人尠からず、食卓に列して隣人の皿を奪ひ、又は食後に出す水(口を洗ふ)を匕にて啜る人もありて見苦しき事限なし、又一方には饗宴を催す家にても西洋の禮式を心得ず、往々來客に對し失禮の振舞尠からざれば、今是等の人の爲に食禮の一斑を記すべし。

食卓——饗宴を催す家にては先づ來客の人數を見積り食卓の大小長短を定むべし、第一に究屈ならざるを要すれども餘り食卓を大にして談話に不便を感ぜしむべからず、大抵客と客との間は六十乃

至七十サンチメートル(我曲尺二尺より二尺三四寸)を適度とす、而して其裝置は成べく雅美風流を旨とし、食卓の上には純白の布を敝ひ盃皿の受々の響きを防く爲め其下に「フラチル」如きものを敷くを宜しとす、其外能く磨きたる「ナイフ」、肉叉、匕及び美麗なる陶皿、布巾の類を用意し、其他藥味、「バタ」、鹽等の諸品は卓の中央に排列し、酒盃等は來客の便利の處に置き、花瓶の裝飾も美麗にし、食尾に出す菓物は皿數少くして澤山盛るよりは量少くとも品數多きを良しとすれば、主婦たるもの玆に留意すべし、さて獻立は大抵料理人に一任する方宜しけれど、器用なる細君は自分で料理し置くも面白し又來客の數に應じ給仕人を供へ置くべし。

來客——來客は定時に先ち五分乃至十分前に集り食卓に就く、但し周章椅子に倚り又は著しく食卓に接し或は離るゝは禮にあらず、心氣を靜め容儀を正し、閑雅靜謐を旨とし左邊に供ふ布巾を胸部にかけて食物の至るを待つべし、而して順序を經て我前に飲食の來るまでは食卓より手を遠ざけ決して待兼たる風情を爲し肉刀又は肉叉を以て食卓等を叩くなどの擧動あるべからず、此間は隣人と閑話するは宜しけれども必らず放言高談を謹むべし、主人及主婦は相對して食卓の中央を占む、これは用事を辨し兼て應對に便ならんが爲なり、

獻立の順序——第一に「ソップ」を始めとし燒肉、煮魚、野菜等普通七皿より丁寧なるは十皿以上に及ぶ、食品の代る毎に飲料(「シャンパン」酒、若しくは「マデール」酒、若しくは葡萄酒の如き)を用ゐるを常とすれども禁酒會員は此限にあらず、尾食には乾酪、菓物、糖果、又は氷を用ふ、最後に珈琲又は好により茶を用ゐるなり、

會食者の心得——食品の好惡を評すべからず、若し好まぬ食品來らば少しく食して止めて可なり。人より餘り早く食し終るは不可なり、空皿を擕へて人の遲きに堪へられざる如き樣子又は食品の最盛を望むが如き風情をあらはすも亦不可也。又遲過ぎるも不可なり、何となれば是が爲め他の獻立遲滯すればなり、給仕來る時は食し終はると否とに論なく必らず皿を下ぐべし。「ソップ」を啜り終らば匕を皿の上に安して給仕に皿と共に持ち去らしむべし、其他の食品に在ては皿を更ゆる毎に食具(即ち匕、「ナイフ」等)を新たにする家稀なれば「ナイフ」と肉匕は十字にせず且つ卓布を汚さゞるやう心して其側に置くを要す。液物を自他の身體及食卓に溢すべからず。烈しき物音又は見苦しき樣子を爲すべからず、

食事中の禁物——食物を滿口に啣む事、食物を喰ふに大口を開くこと。食物を啣みて席を立つこと。同じく談話を爲す事。菓實其他食物の筋骨等を器皿外に吐き出すこと。口部又は咽喉を鳴らす事。食事中に齒を刺し又は口中に手指を入るゝ事。「パン」を「ナイフ」にて割く事。食席に下着の儘又は手指を汚し又は頭髮を振亂して臨む事等、

注意すべき件——飲食の時は意味淡泊なる閑談を爲すべし、決して思慮を要する熟談を爲すべからず。卓布にて手又は口を拭ふは不可なり、必らず自己の胸部なる布巾を以てすべし。塵等の食物の附着し居る時は

人目を避けて密さ摘みて皿の縁に置くべし。脊を椅子に倚せ又は食卓に倚りかゝるべからず。給仕を呼ぶに高聲を發し又は荒々しき擧動を爲すべからず。會食の時人より先に席を立んさ思はゞ一應會釋すべし。食卓に就きては痰を吐き又は嚔を爲すべからず、他に行きて之を爲せ。齒の損するを恐れず骨を噛み菓物の種を碎くなどの振舞あるべからず。醬油を皿の一方に集めて「パン」にて拭ひ之を喰ふなどは不可なり。

晩餐會――交際の爲に晩餐會を開かんさ欲する家は期日に先ち一週前に夫々招待状を發すべし、但し時刻は午後五時より八時頃迄、招待する人數は大抵十二人を通例さ爲す、これ最も便利なり而して賓客は身分の大差なき人を撰むべし、招待を受けたる人は直ちに其諾否を答ふべし、若し出席出來ざる都合あらば其旨を詳記して回答するを良しさす、出席者は其刻限に先つこさ五分乃至十分前には必らず其家に趣くべし、我國習慣の如くワザさ二三時間遲れて行くは要らざる遠慮なり、主人夫妻及家族は刻限より早目に接待室に待受け來客毎に慇懃に挨拶して其入來を謝すべし、饗宴に臨みての席順は時宜に從ふさ雖も豫め奉書紙又は絹地の小札に來客の名前を記し置くも可なり。

夜會――これは衆客胸襟を開きて淸談快話するの目的なれば食品は最初より食卓に排列し、來客をして各自隨意に食せしむるを善さす、時刻は午後八時頃より十二時乃至一時迄。

待遇――晩餐會又は夜會に論なく、人を招待せんさする家は其當日は室内及門前を奇麗に掃除し豫め來客の姓名を案内者に告げ置き、客至らば慇懃に之を迎へ、男客は脫帽室女客は化粧室（大會に於ては）に導き僕婢をして其使役に供して必らず手落なきやう萬事氣をつけ帽子杖等の混雜せざるやうにすべし、主人夫妻は來客の意を損せぬやう慇懃さ丁寧を主さし接待の周到、進退運動の活潑なるを要す、西洋にて食卓に臨みては主人の側に重なる女客を招し主婦の側には重なる男客を招すれども、我邦にては未だ來客も主人も夫妻相並ぶを常さす、これは孰れにても便宜に任せて可なり。

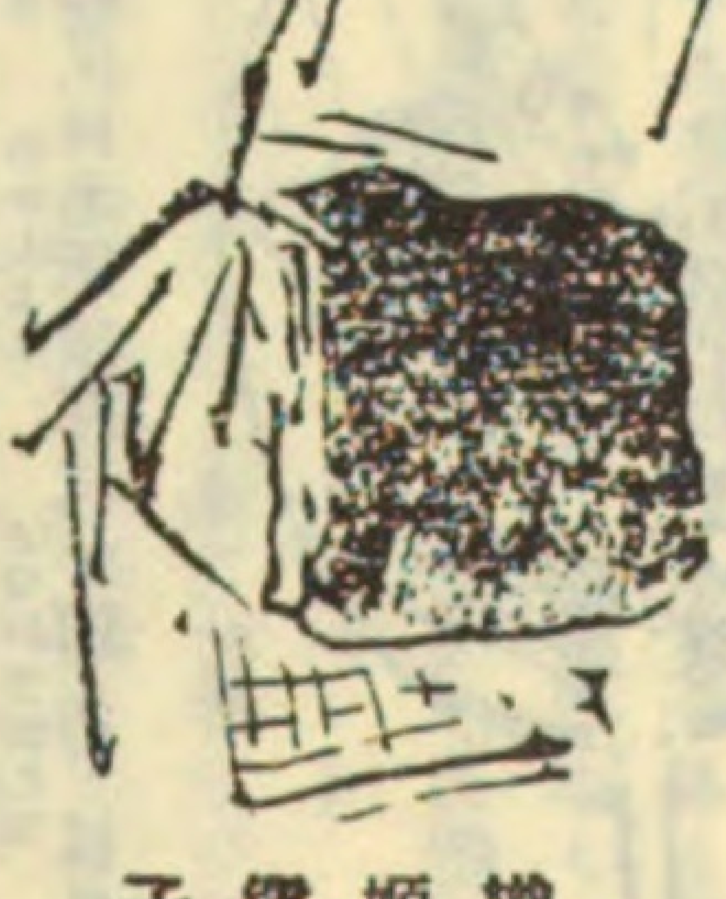
舞蹈會――未だ我國に要なければワザさ記さず。

流行の栞

春夢

織姫繻子

昨年の秋頃より八王子なる日本織物會社より織出しぬ當初は僅に半襟丈（兩耳を有し代價十錢より十五錢迄）なりしが昨今に至りては九寸巾及大巾を織出すに至り啻に黑繻子のみならず種々の色物に面白き型を捺したる優美の品を出す而して其品質に於ても光澤に於ても保存に於ても遙かに彼の南京繻子に優る南京は横絲太く縦絲細き故保存甚だ惡



織姫繻子

しさ雖も織姫は然らず横縱糸共に同樣なるをもて彼よりも優れり此故に南京繻子は毎年輸入高百萬圓餘なりしも此織物出でしため四十萬圓位を減したりさいふ但し價格は下等一尺十一錢より中等は南京さ同價上等は一尺二十五錢なり

薄絹

前號に報したるが如し昨今婦人向帷子の流行は第一に絹上布なり色は淡鼠、千歳茶、淡葉鼠、肉色、淺黄、柄は重に竪縞「チギト」飛白、矢絣、飛絣等なり、

絹上布流行柄



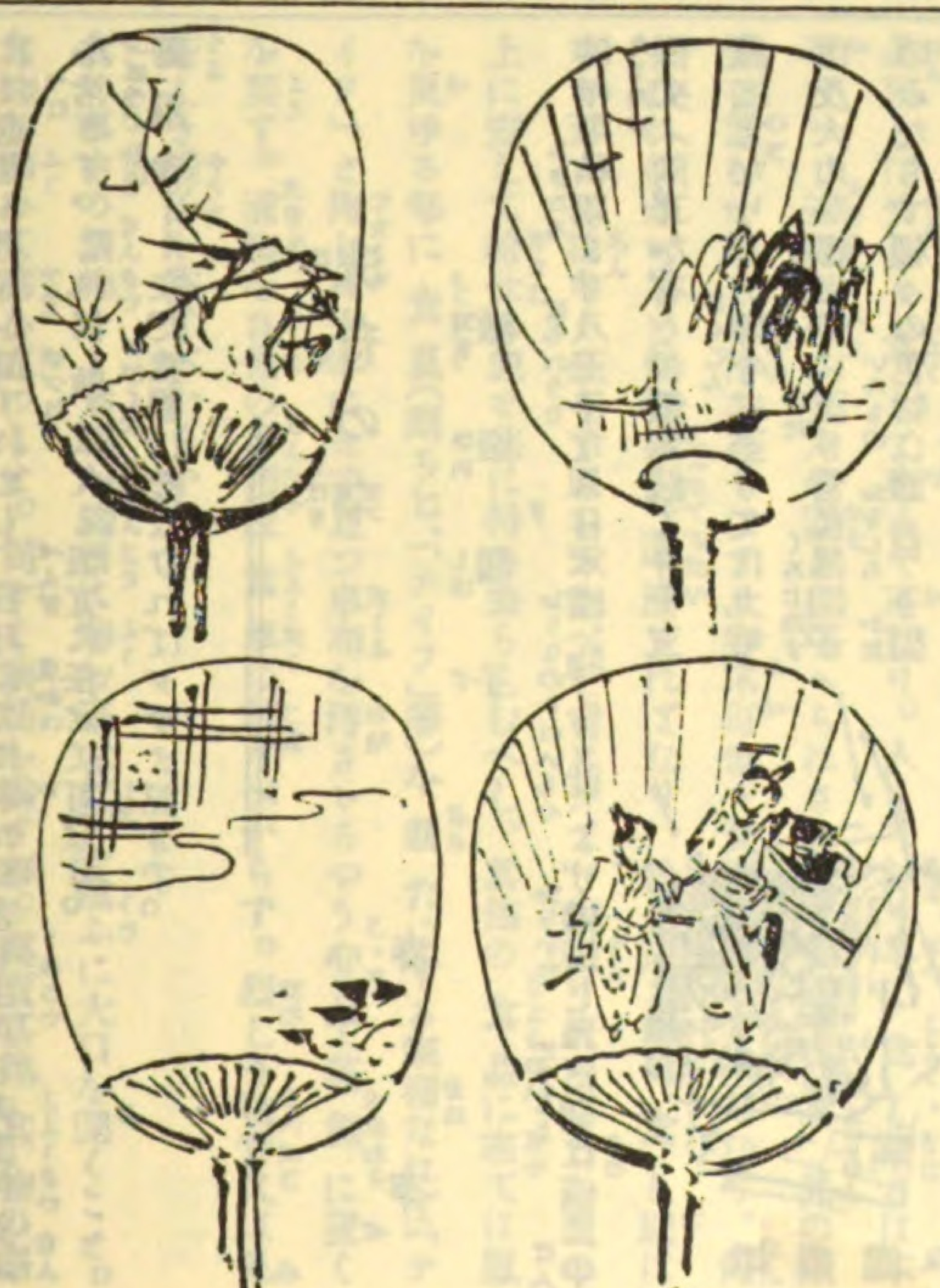
次は桐生製出の瓦斯お召なり（價格割に廉價、三圓より四圓五十錢位）これは誰が見ても本お召に異ならず實に見事なる出來なり柄は淡色微塵、珍縞、木賊縞萬筋、綱大名最も流行

其次は西陣製出の壁透屋（四圓五十錢位）なり、これも本透屋さ分毫の差違を見ず柄は前同斷

右は通一丁目白木屋にて最も手廣く賣捌き日々の賣高數十反に上る由なり

團扇

本年團扇の流行は昨年さ差したる異變なく玉子形最も多く行はれ棗形之に亞ぐさ云ふ而して其繪模樣は成るべく淡泊瀟洒なるを喜び山水魚介の墨繪最も人氣を占め熱苦しき人物繪又は名所繪抔は一向行はれ



す（土産物は流行以外なり）然しながら偶ゝ元祿風の絲鬢奴を畫きたるものは或一部に行はる、縁は江戸紫柄は勿論磨き、又は塗柄も流行す、兩耳に房をつけるものは如何に可憐なる少女の手中に操らるゝよ

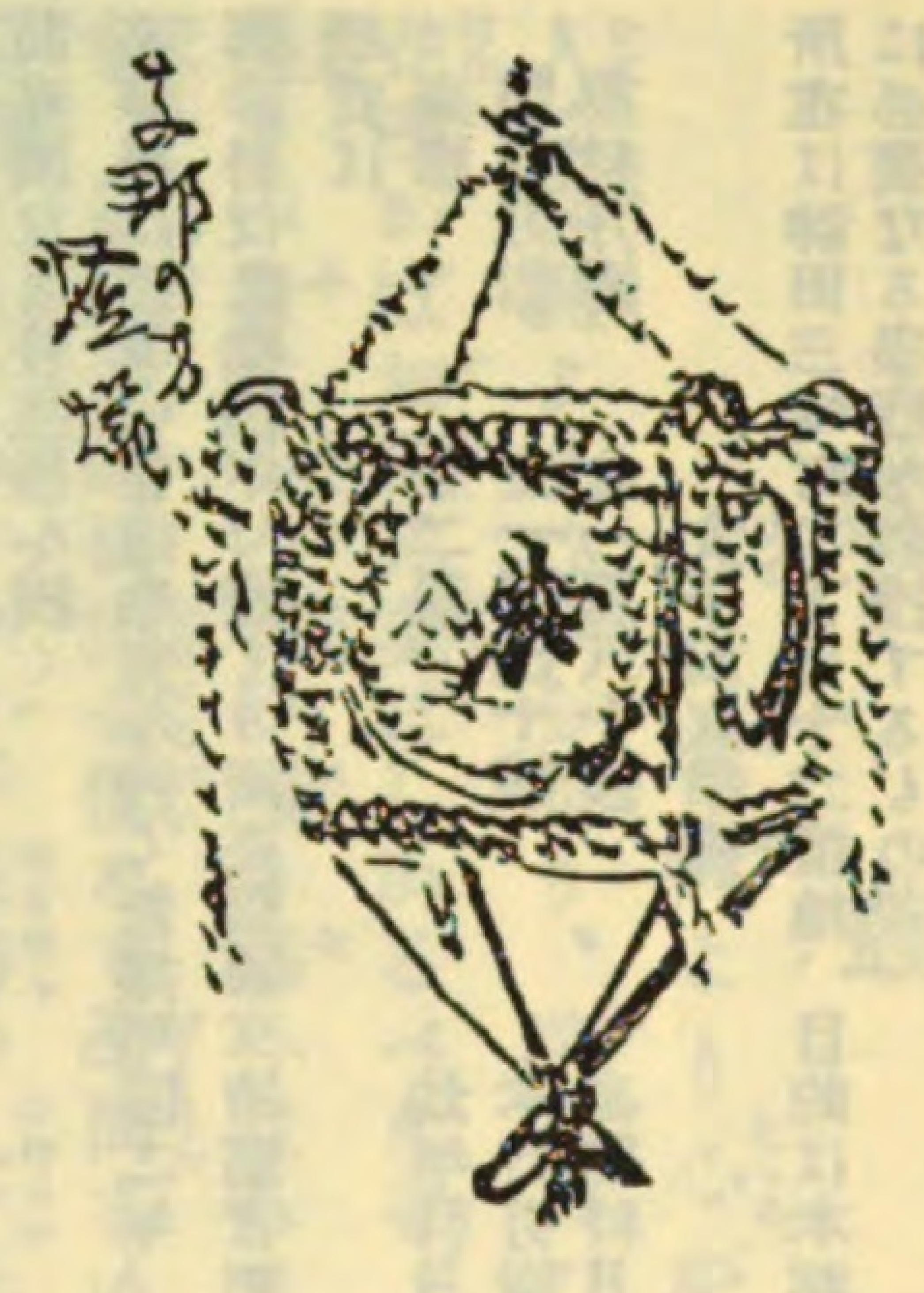
岡山の夏川團扇、岐阜の岐阜團扇も弗々東京にはやる

「蚊に困る蚊もまた困る團扇かな」、東京邊の流行團扇は豹脚先生を

撲殺するに足らず僅に涼爐の側に澁團扇あるのみ

岐阜提灯と支那燈籠





岐阜提灯は毎年新形あるにあらず何時まで同形なるが岐阜提灯の岐阜提灯たる所以なりと相變らず花鳥風月の淡泊なるもの

支那燈籠は實に新奇にして美麗なるもの右二品昨今椽端の風鈴に伴ふ第一流行品

一種の根懸

近來東京娘に盛に行はるゝは人形町通り豊年家にて賣り出したる忍草掛なり此は釣忍草に形どり茶と萌黄の絹糸もて製したるアッサリとした根懸なるが一ト掛け僅かに一錢五厘にて時節柄あつくるしき挿ものは斥けられ洗ひ髪に忍草掛をかけて最と涼しさうに見ねける

日用品物價

◎白米(一圓に付)〇一等九升五合〇二等九升八合〇三等一斗三合〇四等一斗九合〇五等一斗一升五合

◎塩　赤穂三俵七分〇大鹽井八家三俵七分五厘〇本齋五俵七分五厘〇新齋六俵　六分

◎雜穀　新本貫三斗六升〇新膨場大船麥三斗八升〇粿麥二斗五升五合〇相州小麥　一斗九升〇麥橋小麥二斗一升〇同新小麥二斗二升三合見當〇常州小麥二斗四升〇下總小麥二斗四升五合〇千葉小麥二斗二升川札入林竹麥一八　五並二〇五〇上割麥一九

◎種油　地水七圓二十錢〇胡麻八圓五十錢〇荏油十二圓七十錢〇一川七圓九十五　錢久ト七圓九十四錢イ九十二錢〇桐七圓也久一八圓〇五錢〇星印八圓也〇ホーキ一圓六十四五錢〇チャスタ一圓六十一二錢〇露國一圓六十一錢

雜録

遺珠顆々

彼女の音聲は常に靜かにやさしく低かりき是れ婦人にありて尤もすぐれたる事なり　セーキスピーア

快活なる想像的なる滑稽的なる氣質を有する者は靈の清夏を有するものなり斯る清夏の大氣の中にありては道理の念も一層明白に働き其良心も一層正確に忠實の操も一層よく働かむ—寒帶的の意地惡き氣質の中に働かむよりは　ビーチャル

目的なき生涯は憫きものなり我等は「今日まで爲しつる所は皆無なり今日よりこそ確かに事を爲し始めむ」と云ひつゝ日々吾目的を新にせざる可らず　トーマス、ア、ケンピ

女學校

其一　東都私立學校（承前）

明治女學校

明治女學校は基督教主義の女德を養成せんとするものにして麹町下六番町に在り、其分科課程は

幼年科は小學の程度に據り幼年者を教ゆ、

普通科は修業年限豫科三年本科三年にして、高等小學及び高等女學校と同程度なる普通學を授く、

高等科は高等の普通教育を授く修業年限二年、

專修科は修業四年、授くる所英語國文繪畫音樂女禮裁縫速記師範八課、

學費は

束修　金二圓　幼年科月謝　金三十錢
豫科月謝　金一圓四十錢　本科月謝　金一圓六十錢
撰科月謝　金一圓八十錢　高等科月謝　金二圓

女子成立學校

所在は神田三崎町二丁目十二番地、目的は本邦女子の淑德を養成し女子に必要なる學藝を教授するもの、

學科は、本科三年、

修身　和漢學　習字　數學　理科　地理、歷史　生理、衛生　家政、經濟　英語　裁縫　編物、刺繍　音樂　圖畫　挿花　茶湯　料理

高等科二年、科目は本科と同じ稍高等なるのみ、

普通科二年

修身　和漢學　數學　習字　裁縫　編物、結紐　料理

外に手藝に關する課目のみ專修するものゝ爲に手藝科を置く修業年限は一年なり

學費は

束修　本科　金一圓五十錢
普通科、手藝科、撰科三課目以上　金一圓
月謝　高等科、本科　金一圓五十錢
普通科　金一圓
手藝科　金六十錢
撰科
和學、漢學、英語、裁縫、等　金五十錢
右の外は一課目　金三十錢
教場費（一ヶ月）　金二十錢
但し撰科二課目までは要せず

頌榮女學校

は明治十九年十月に創立する所、芝區白金猿町五十四番地に在り、本科三年、倫理　和文　漢文　英語　譯讀　歌學　地理　歷史　理科　教育　家政　圖畫　手藝　音樂　躰操　茶禮等を教ゆ

豫科は高等小學科なり

學費

束修　金一圓　入學の節納むべし
月謝　金一圓　毎月十五日迄に納むべし
校費　金二十錢　前同斷
寄宿料　金三圓　毎月五日迄に納むべし
但物價の高低に由り增減することあるべし

高等女子佛英和學校

神田區猿樂町七番地に在り、修業六年、學科は

倫理　和漢學　佛語　英語　歷史　地理　算術　習字　圖畫　物理　家政　禮法　裁縫　躰操　音樂

學費は

束修金一圓　月謝金一圓二十錢　ピヤノを修むるものは別に月謝金一圓　裁縫專修の者月謝金一圓

女子神學校

所在神田駿河臺北甲賀町十三番地、希臘教の女學校なり、

豫備科三年、
教理　讀書　地理　理科　數學　書取　作文　習字　裁縫　唱歌
本科四年、
教理　漢文　國文　數學　簿記　理科　地理　文典　作文　衛生　歷史　圖畫　習字　唱歌　裁縫　刺繍　編物　割烹　躰操
外に撰科あり、
寄宿生徒は食費及び筆紙墨炭油料さして一ヶ月金四圓を出さしむ、束修授業料は一切之を要せず、

談叢

人は容貌より心から

人は容貌より心がらなり、深山がくれの朽木姿も心の花咲かば如何に美はしかるべきぞ。况してや姿も花の盛りの身に心の花の咲き添へたらんには。

昔、長門の國に瀧長愷とて學問といひ品行といひ時に名高き人のありけり。萩藩の士に某といふが女、常に友どちに語りけるやうは『妾は瀧先生の如き人を、幸に夫となし得さふらはむには、一生の願も足りはべるに』と。彼女の友どち皆嘲り笑ひつゝ『彼の娘子は其身の容姿の醜きを顧みで、妄りに好く配偶を望むこその可笑しさよ』といひ、遂に彼女等の間の物笑柄とぞなりにき。長愷聞て『其女こそ我が知己なれ、定めて能く我が家を修めなん』とて、遂に之を娶りける。果せる哉貞淑にして賢德ある彼女は世に珍らしき良妻となりぬ。

或日の事なりけり、彼女は其良人の前にて甲斐〲しく立働き居けるが、如何にしけん彼女の袖より一個の赤き毬落ちにき。彼女の良人は異みて之を問ふに、彼女は顏打赤らめて答へけるやう『妾は良人に事へて生平過の多きものにはべり。去れば自ら窃に之を矯めんと心掛けさふらうて、二つの毬を製り、惡しき念慮の出で來し時は赤絲を纏ひて之を記し、善き心の起りたる時は白絲を纏ひけるに、初の程は赤毬次第に大きやかになりければ、斯くてはと深く心を用ひ候ひしに、今は白毬の方やう〲大きくなりはべりぬ。』と、袖を探りて更に取り出しける白毬に、彼女の清き心根知られてけり。

彼女の良人はいたく打感じ、是より幸福なる彼女夫妻は、更に其幸福を增しにき。

水泳

水泳の術は何人と雖知らざるべからざるのみならず、海國の人海の旅行者の如き、死なでもよき命を水泳ぐことの出來ざるために死するもの少なからざるなり。中にも軍人武人の如きは取りわけ覺えおらずば叶ふまじ。去れば江戸幕府の頃にさへ、徒組の輩大川に小屋をゆひて日々其技ならへる事のありき。

今其初を尋ぬるに、江戸第一世將軍は若き時より頗るこれを好める人にて、年毎に夏としいへば、彼は日に岡崎近き川に游泳しつゝありき。故に彼が家人は皆其技に達せずといふことなく、諸公子さへ誰とて之をならはぬはなかりける。

慶長十五年七月駿河の瀬名河に漁獵の時、第一世將軍親ら游泳したまふと物の本に見ゆ。此時彼は實に年六十九なれば、彼が强健の程も思ひやるべく、又彼が如何に之を好みたりしかをも知るべきなり。

かゝりければ產褥の上より已に太平君主たりし第三世將軍の如きさへ、城溝に或は溜池の內藤左馬助政長が邸に行て度々親ら之を試みぬ。其正保四年隅田川の狩に徒士の水泳を覽し時、彼は其未熟なるをいたく不興がり、徒頭を喚て之を誡め『今後は宿直の外は毎日川邊に出でゝ水泳の術をつとむべし』と命じき。さてこそ彼が世に斯く水泳習練の例は出で來つるにてあなれ。

繪畫

丹青叢譚

燕隱生

一、昔時繪佛師良秀といふものありけり、一日その隣家より出火しておのれが家に燃え移りければ取るものもとりあへす逃れ出でゝ向ひ側に立ち、我家の燒け落るを餘念なく見入りて何やら獨りうちうなづき笑ひながら、我悟たり〳〵年比書き來りしは惡かりしと頻に喜び居る躰に、訪問に來たる者どもはあさましかりて、何故におのが家の燒けたるを喜びたまふぞと問ひければ良秀はいなとよ、誰しも我家の燒けんをうれし

と思ふものはあらざるべし、されど今火焰のたちのぼる樣をみるに我年比畵き來りし不動尊の火焰は一としてよきはなし向後はかくこそ畵かめ、これわか悟りたる所なり、また我は佛繪師なれば佛だに能く畵かは百千の家も出來得べし、そを思はゞいまこの家一つ燒けなばとて惜しきことはなしといひければ人々感じあへりとぞ、

二、僧雪舟俗姓は小田、名は等楊、雲谷と號す、備中赤濱の人なり、幼なかりしとき其父これを僧となしてその國の寶福寺といふに居らしめたり、天性畵を好みて經讀み磬鳴らすことを怠りければ師の坊いたく誡めけれど尙きかで畵ばかり書きいたり、師の坊こたびは堂の柱に縛りおきぬ泣き叫べどもいらへせでうち捨て置くに、雪舟かゝる時にも例の畵癖起りて、落る淚を足の大拇につけて鼠を畵きけるにその畵眞に迫りて殆んと馳け出さんはかりなり、師の坊もその妙技に感じこれより畵事を禁ぜざりしとそ、後長じて明國に遊そび四明天童の首座となり大に彼の國にもてはやされしとぞ、

三、泉州堺に一國寺といふ精舍あり庭園も狹まからず院落も五間ほどある中に一間には檜の樹一本をゑがき、一間には臥したる鶴二十四五羽ばかりをゑがきてあり、いづれも彩色ありて古法眼元信の筆といひ傳ふ、當初元信この寺に寓居すること三年に及ぶといへども何ひとつ畵きたるとなく日々遊びくらしてありければ、あるとき住持のいひけるがそこ許は畵をもて一家をなせりといひながら、いまだ筆とり上げたるを見ず遊びてのみ年月を送らるゝはいかにぞや、我費を厭ふにあらねどもいづかたへ行きて遊びたまへ、愚老も所用あれば京へのぼり、ことによりては一年も在京せんもはかりがたしといふに元信きゝてそれこそいと名殘惜きかぎりなれ、されば年來の御恩に何か畵をかきのこしまいらすべしとて、又四五日もなるほどに畵くべきけしきもなし、ある夜小坊主の住持が居間に夜ふけて來り、ひそかにいふやう、かしこに行き、そと覗きて繪師のありさまを見たまへとさゝやくに、やがて小

坊主にいざなはれて元信の居間をうかゞふに明り障子の腰板に身をよせてさま〳〵の姿をかへつゝ寐起するありさまをみて、何する事かと訝かりながら、小坊主にのぞくべからず、はやく臥せよとて、その身も寐間に入りたり、あくれば元信早晨に起きいでゝ一間の襖に畫くを見ればみな臥たる鶴なり、筆力畫勢ともに非凡にして丹青の妙いふべからず、さて又の夜はいかにとうかゞふに前の如く夜もすがら寐ずして明なばかくや畫かんとやせんなど獨りつぶやきつゝ臥しぬれば住持もしら白顏して過しこの十日あまりにてその鶴凡そ二十四五羽をゑがきけり、また夜ふけてうかゞふに、こたびは肘をはり足をのべなどして鶴のふしたるさましてゐたり、明る日元信のもとへ住持來りて、けふゑがき玉へる鶴の姿はかやうにや染ぬらんとよべ覗き見たる姿のさましして見せければ、うちおどろきて禪師にはいかにして我思ひかまへし心を悟り給へるにかと問ふにしからず昨夜君のやうすをそとうかゞひて知りたりといへば元信それよりして二枚は畫かずして杉戸の畫に檜の木一樹をゑかきて出て立たり、その後東國へ下向の折から東海道箱根の山中にて檜の木の枝の心にかなひたるがありければ東國へは下らずしてふたゝび泉州一國寺へたち越しかば住持みて大に驚き東國へ行たまふと聞しに又もや來られしはいかなることかといふに、さきに畫きし檜の木の枝ひと枝足らぬところあり箱根にてその意を得たれば立もどりたりとて一枝をかきそへいとまごひしていで去りぬ、

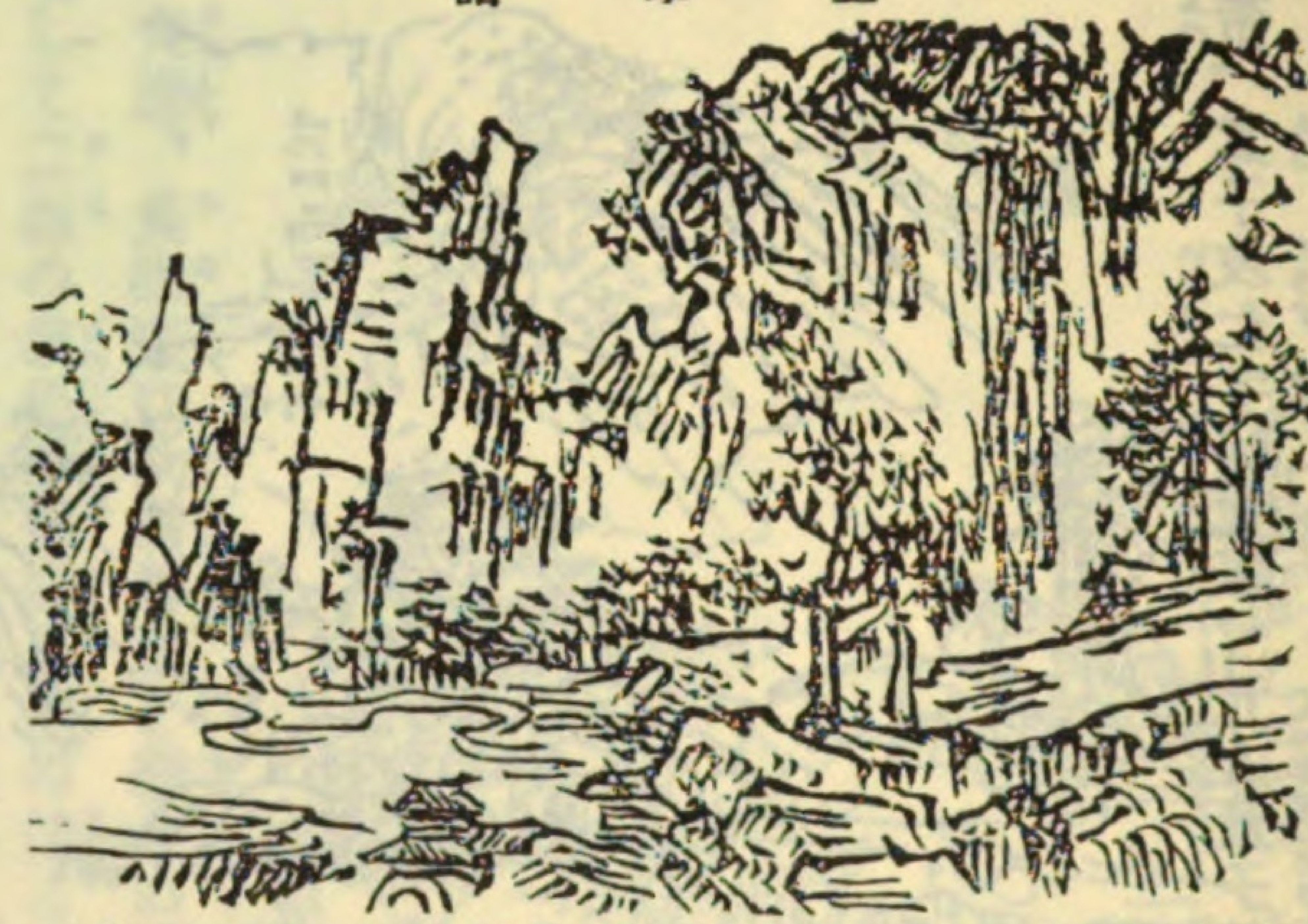
（未了）

無聲詩話（二）

小兒の繪をかきならふを見るに、其最も初にかくは人形の首にして、山水風物の如きは繪畫思想の餘程發達せし後にあらざれば之を畫かんとはせざるなり。

世の繪畫思想も亦個人と同く、第一に發達したるは人物畫にして、殊に六朝の頃より老莊虛無の說世を風靡し、唐より五代に至りて佛敎天下に禮拜せらるゝに及

び、道畫佛畫に、最も名手を出し、最も神品を生じき然るに世の次第に進むや、啻に人物の上に其趣味を有するに止まらずして、天然物にも趣味を生じ、山水畫

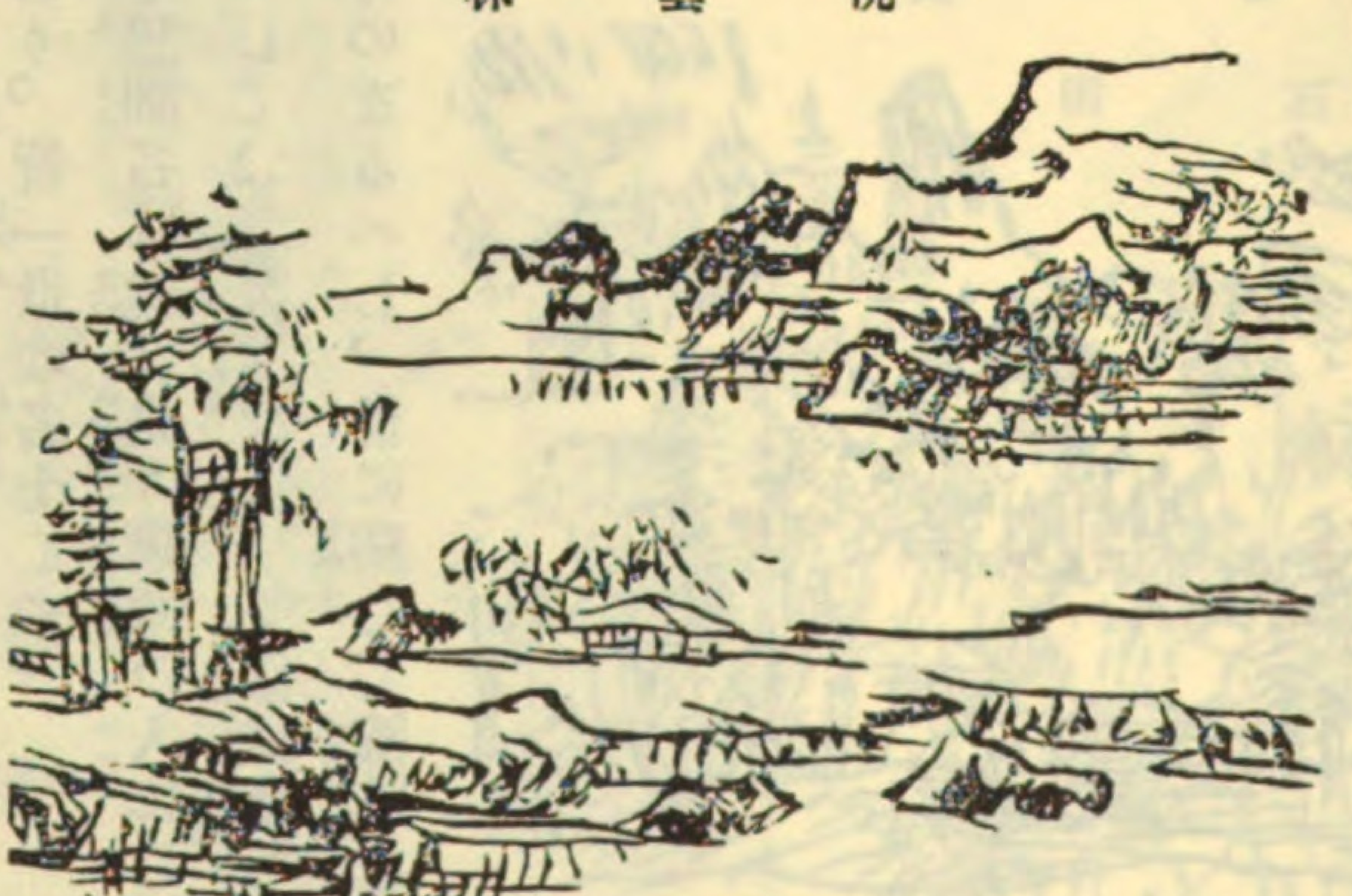

王摩詰

漸く起りぬ。詩歌が其初專ら人事の或る情を歌ひしもの、後には却て山水風物をのみ吟哦するやうなりたるが如し。

山水畫は唐に至りて大に起りぬ。王維、李思訓其妙を窮め、所謂南北二宗の祖となれり。

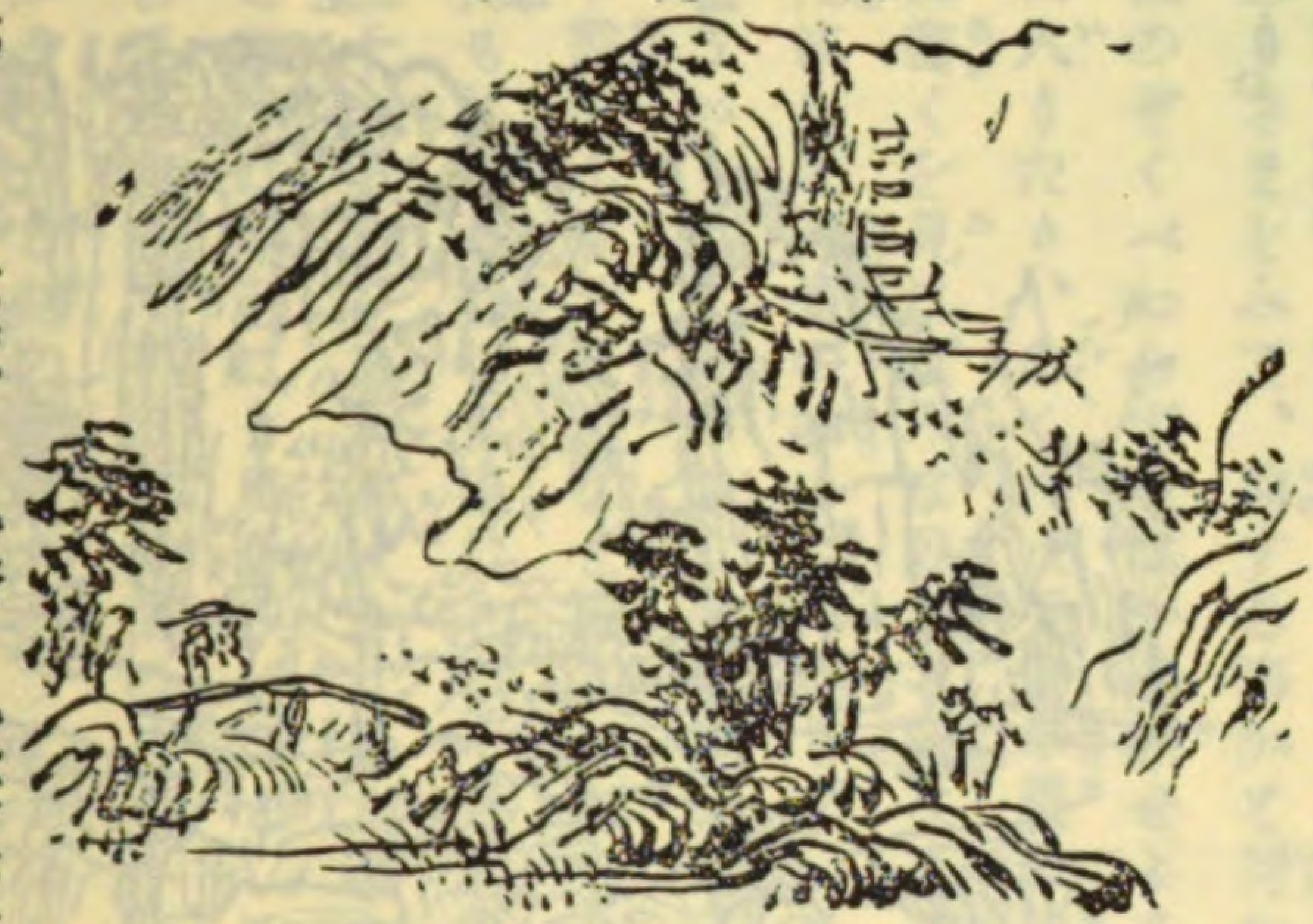
繪畫に流派の出で來しは是より初まりしものにて、繪畫の要は唯寫眞と美術的氣韻とを備ふるの他あるべからずして、もと流派の別のあるべきやうあるにあらざれども、長所の同じからざるより、之を好み學べる人の間に確執を生じ、遂に流派の名を負ふに至れるなりき。

王維は江南日暖に水長き地方の人にして、温籍なる山野は彼を潤雅に養ひしのみならず、彼は名高き詩人にして、特に佛學にも達し、禪機を得たるものなりけれは、胸襟自ら高し、筆意幽澹にして神韻あり、主ら餘情を尙びぬ。後人稱して文人畫といへり。


倪雲林

王維字は摩詰。

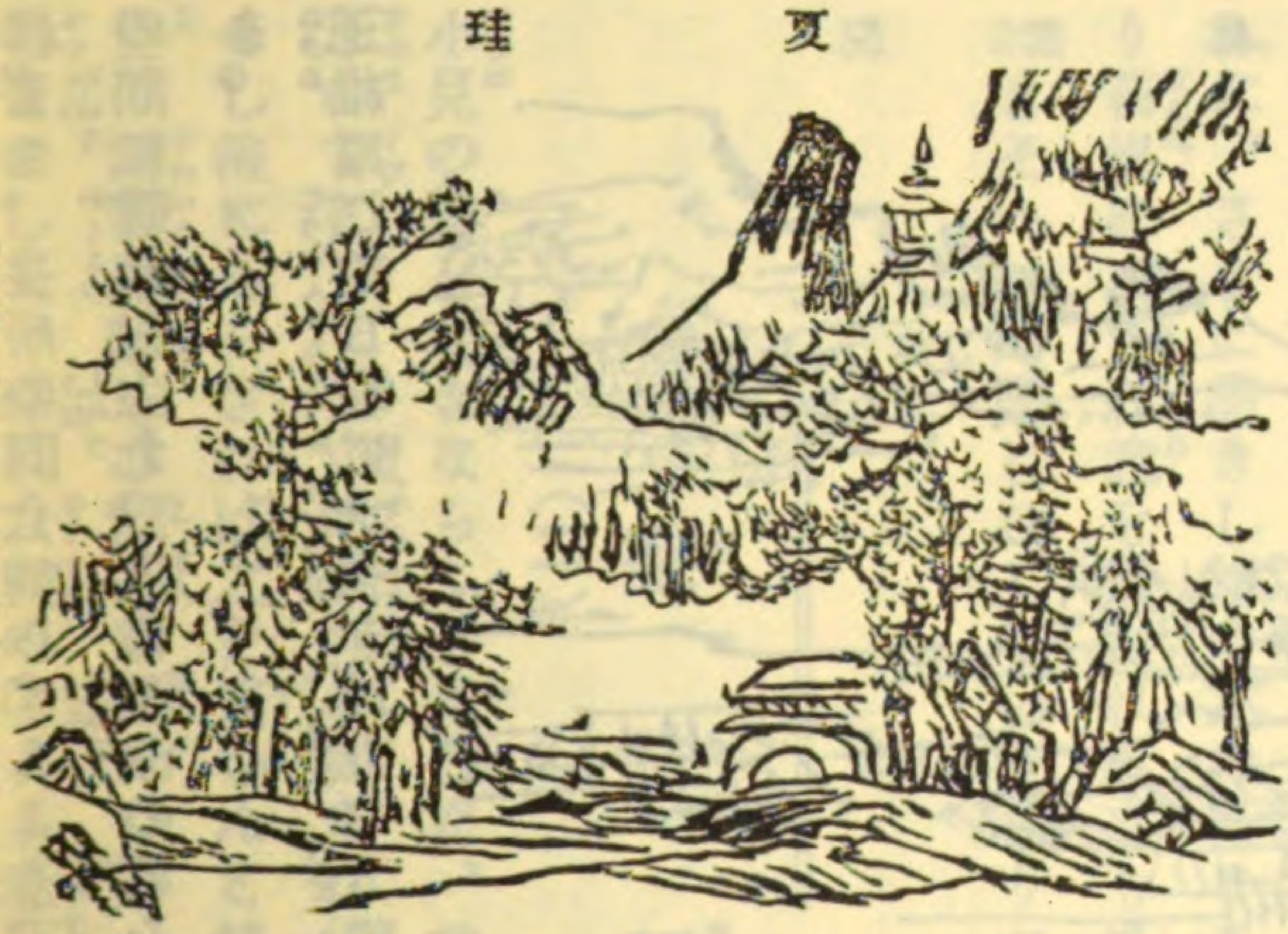
彼が流を汲みて名高きものは皆是れ文士、詩想を以て筆を把り、寧ろ寫眞を顧みずして、美術的氣韻をのみ主とせる傾向ありき。



米元章

荊浩（字は浩然）關仝之れを傳へ、畢宏、張宏（字は文通）より、宋人李成字は成熙、范寛名は中正字は仲立、李龍眠、王晉卿名は詵、董北苑名は源字は叔達、釋巨然、米元章名は芾、其子友仁字は元暉、元人黃子久名は公望、王叔明名は蒙、趙子昂名は孟頫 松雪道人、梅花道人吳鎮字は仲圭、倪雲林名は瓚字は元鎮、明人沈石田名は周字は啓南、文徵明名は璧衡山居士、董其昌字は元宰等、其流を汲めり。而して清人にも、王烟客、王廉州其他あり。皆一世の名士とす。

李思訓名は達、北方爽健の人にして、風骨奇峭且巧妙にして、其圖樣備はれり。彼は寧ろ意を寫眞に存したるものなるべし、世に稱して院躰といふ。



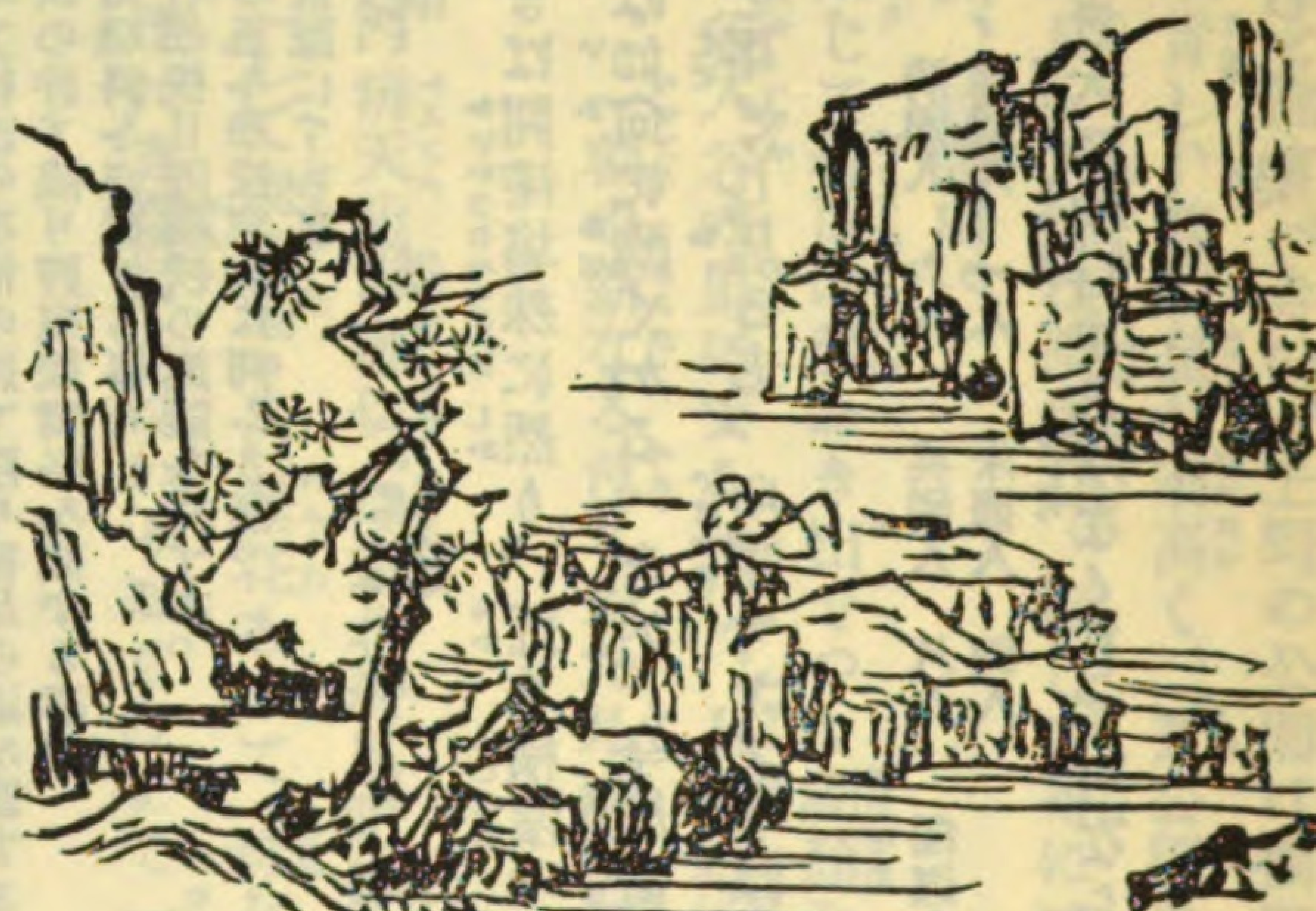
夏珪

院躰をば文士は見て以て俗氣ありとて、常に之を輕侮したりと雖、之を文人畫の缺除せる圖樣に圖外の意を含ましむるものに比するに、却て繪畫の本色には近きものなりき。

思訓の流を承け所謂北宗と稱するものには、彼父子及び趙幹より、宋の趙伯駒字は千里、

其弟伯驌、馬遠字は欽山、夏珪字は禹玉、明の戴進字

馬遠



は文進、呉偉字は次翁等之を繼ぎぬ。

而して二派の旗色は荊關馬荊の徒に至るも、始めて鮮明になり、南宋は董北苑、釋巨然米元章父子に至りて大に其面目を改め、延て清氏の世に及びしも、北宗は明人に退けられしより、其後は之を繼ぐものなしと云ふ。

（接後）

沈石田



時事一斑

夏

夏は安息を以て人に貼れり。男女學生は清樂を擔ふて幸福なる家庭に集まれり。彼等が翠陰に坐する所、非ニ必絲與一竹、山水有ニ清音一。

騎馬旅客歸

三千三百里の長途を旅し盡したる騎馬旅客は歸れり。

六月二十九日東台下不忍池畔は雲霞の如き人叫べり、『福島中佐萬歳』。

毅大臣教育意見

七月一日大日本教育會其總會を開くや、井上文部大臣臨で教育意見を述べぬ。

第一　國家又は地方經濟の事情の許す限り補足の道を講ずる事。
第二　市町村經濟の許す限り將來授業料を減ずる事。
第三　小學校に裁縫科を必置する事。
第四　夜學校半日學校日曜學校の施設を爲す事。
第五　奢侈華麗の風を學校部内に抑ふる事。
第六　教科書を低廉にする事。

醜業窟

淫風の甚しきは開港場殊に然り、近く横濱の如きも之を裸体にせば如何に醜くかるべきか。今居留外人にして醜業媒介を事とし居る者、所謂チヤプヤは實に左の如しと云ふ。

米國人	十四人	清國人	六人	英國人	八人	獨逸人	一人
佛國人	三人	墺國人	一人	米國人	四人		

矯風濟世の士、豈大に留目する所なくして可ならんや。

行樂

『かたはみや照りかたまりし庭の隅』。赤き大陽は渦まく如き暑さを下界に振り撒きて、日の中は行歩もならじ。都門の夏は今年も來にけり。

夏の東京は夜の都なり、長き日を窓深く蟄居したる彼等は夕暮より翅を生じて街頭を舞ひ或は店頭の納涼臺に袂を聯ねて夜を深かすなり。『夜涼やむかひの見せは月がさす』。



而して其夜の都を以て滿足せざるものは皆山水の夏を趁ふて北に南に西に東に去る。溪雲掬すべき日光の山、翠光滴らんと欲する函根の嶺、興津大磯の晴波、伊香保霧積の曉嵐、共に奢侈なる彼等を牽くに足るなり。去れども斯くの如く

遠き山海の涼風を趁ふ能はざる彼等は、當に那邊に去て其日の中の涼を掬すべきか、上野の公園は樹深し、王子瀧の川は水青し、麹町星か岡高く、芝公園の丸山近し、目黒靜かに、芝濱は風多し。而して舟には則ち二州橋下、中洲、綾瀬川。

又かの曉露に乘じて村雨の露おき出でゝ朝顔を觀んとする人は、下谷入谷の里に去るべし、上野新坂下鶯溪園に去るべし、一朝の新なる色も未た見ばえなくんはあらじ。

不忍池、芝公園内辨天池、堀切、淺草北淸島町妙音寺、千東村、皆亭々として濁に染まぬ蓮花ありて、珠を欺く露を宿せり。『朝まだき露散るばかりおもほえて一片開く花はちす哉』。

此の暑氣をも恐れずして參詣あるは、これなん四萬六千日。淺草觀音、芝伊皿子魚籃觀音、音羽護國寺（以上十日）、芝愛宕山（二十四日）。

十三日の草市は銀座、兩國、淺草廣小路、神田旅籠町、本所吉田町、今川小路、人形町通。

十六日は閻魔堂。

廿六夜待は品川、高輪、九段坂、湯島天神、神田明神、駿河臺、洲崎辨天、佃島、如何に多くの人が月を待つよ。

嗚呼、彼の夏の夜の月、如何に興ある夏の夜の月、

庭の面はまだかはかぬに夕立の
そらさりげなくすめる月かな。　賴政

投書

妻を擇ふ事

かすみ女

或る經驗に富める婦人あり、一人の年壯き甥を持ちけるが、其男この頃妻を迎へんとて頻りに其人を索むるを見て、祖母なる彼の婦人は心ないため、とかく若き人は迷ひ易きものなればとて、長々しき一篇をかき送れり、今こゝに其概略を記さむ

婚姻のことの重さは今更いふまでもなし。妻を迎ることは即ち汝が半身を得ることなり、かくてこそ汝は尋常一般の人の本分をも盡し得べけんなれども、さて其半身の良否によつては健全の人ともまた羸弱の人とも成りゆかんと疑ふべからず、故に汝が今后の生涯の幸不幸は、その撰擇の如何

によりて定る、善良なる女に勝れる可はなき如く、惡き女に超越惡きものもなし。「賢き婦は其夫の冠なり、辱をきたらする婦は其夫をしてその骨に腐あるが如くならしむ」といふ、

汝の身分より遥か勝れたる所のものを迎ふる勿れ、彼は我儘にして常に汝を困むるならん、さりとてあまり賤き家の娘な撰みそ、心ざまも貴きは少なし、彼は俄分限を恃み、傲奢に流れ易し、持參金して嫁ぐ女に難癖のなきは稀なり、もし彼十人並の容貌才能を備ふるものなれば、必ず夫をしのぎその心の自由を毀傷ふ、顏よきをのみ望む勿れ風景よき眺めも不斷目に觸れば其趣を失ふ、眉目容貌も只よき心操にて光を添ふるものなり、世間を見渡すに、とかく美人は心落つかず、節操を全ふしがたき傾きあり、もし美人にして心正しきものあらば、そは夫の譽なり、されどもよく思へ、今日うるはしと思ひ入りし花も明日に至れば何となくその艶麗を失ふに非ずや而して終にうつらふ色を見よ、只貞實なる心の輝は日々に其人の容顏を貴くす、頭に白髮をいたゞき、額に老の浪をたゞよはすも却て人の心を悅服むるもの也、われ繰返して之を言ふものは、男女に限らず美貌は若き人の尤も喜び迷ふ所なるが故なり

跛、片輪、侏儒の如きは避くべし、汝は世の人よりかろしめられて一生頭角のあがらぬのみならず、疾病を汝の子孫に傳ふべし、就中尤も忌むべきは痴愚なる婦なり、彼は汝に辱をきたらせ又汝の秘事を洩すべし。道理に暗く一家の管理もできず、折ふしさし起る難事をも制裁しかたく、且夫の友とし呼ふほどの値なき女は汝の扶助者には非ずして寧ろ重荷となるものなり、汝は彼の爲に業を煮すを堪へざるべし、「惡しき女は己の手をもて其家を毀」といふ、惡女と婚するは不幸の極なり、されども愚婦を迎へし人こそ其行先きも見ゆるやうにていと憐れなれ

かたちのよし惡はもと固有性なれば詮もなし、只心の美に如くものはなけれども、目鼻容もけうとく、冷しく見ゆるまでに醜きは心ざまも直なるは少く、大低は性根の僻るものなり、人の侮を受るのみならず、常に汝を不愉快にす、さはいへあまり優美に過ぐるとて其風情もいとあはれに外山の霞、葉末の露のふかは消なんやうなるも心細し、細腰折んばかりに打かつげる衣も重げに見ゆるよりは、朝夕の飯も味よく食ひ、足踏もしかくとしたるはよし、撫肩にして風采よく見惚るゝやうなるより寧ろ、不恰好なるも胸部廣く肺臓の强き方大に優れるなり。年老けたるは大抵嫉妬深く、剛情にして人の言を用ゐず、あまり少きは了簡もなくてさる時の用にも立ちかたし、二つながら好しからず、されども少き女にして一家を治むるほどの才もあり、氣質も温順からば、そは善良なる妻なるべし

（未完）

平民叢書

再版

第一卷 十九世紀之大勢

定價十二錢　郵稅二錢

再版

第二卷 經濟上之變動

定價十二錢　郵稅二錢

銀貨大下落、三日間に七弗二十五仙の下落、實に我が商業界を驚殺嚇殺せんとす。惟ふに經濟界萬丈の浩瀾を湧漾し來るものそれ此に在る乎

苟も疑問あらば、本書に就て質せ、本書は獨り過去に溯りて其の淵原を示すのみならず、亦た將來に向つて、其救濟應變の策を指點する也。

再版

第三卷 國家と政府

定價十二錢　郵稅二錢

國家の中に立つ者、政府を戴き政府を作り政府を監視するの人民は反覆熟讀せよ、汝が立ち、汝が戴き、汝が作り、汝が監視する所のもの丶何なるかを明知せん、

第四卷 教育と遺傳

定價十二錢　郵稅二錢

紛々たる教育界の羅針盤たる可きは此書也、教育家は固より人の進步開發に注意する者は必らず座右に一本を置く可し、

第五卷 文明之弊及其救治

本月下旬發賣　定價十二錢　郵稅二錢

文明の起原及歸趣◎野蠻と文明○健全なる生活○人間の墮落○第二の樂園●文明と科學◎現時の科學○將來の科學●文明と道德、等

文明の弊は文明の罪なるか、文明は其の弊をも併せ有すべき性質を帶ぶるものなるか、文明の弊は果して醫することを得べきものなるか、若し之を醫すること難からずとせば、如何なる手段に依つて、其の目的を達し得べきものなるか、而して其の手段は如何なるものなるか、是れ本書『文明の弊及其救治』か明に說明する所、

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

THE TWELVE MEN OF LETTERS

毎月發兌

拾貳文豪

十二文豪（全十二冊毎月出版紙數二百頁内外一冊十八錢全部二圓外要郵稅）

『平民叢書』が社會より受けたる歡迎、受けつゝある歡迎は、我社をして更らに新奇なる一歩を轉ぜしめたり。何ぞや、『十二文豪』の出版是れ也。

題して『十二文豪』と云ふも、敢て世界傑出の文豪十二人を撰びたりと云ふにあらず、唯だ各〻その好む所、知らんと欲する所、又た知る所に就て、『十二文豪』を編纂したるのみ、其の目錄左の如し。

『エマルソン』……北村門太郎
『ゲーテ』……高木伊作
『頼山陽』……德富猪一郎
『トルストイ』……德富健次郎
『マコレー』……竹越與三郎
『瀧澤馬琴』……塚越芳太郎

『近松巢林子』……塚越芳太郎
『新井白石』……山路彌吉
『荻生徂徠』……山路彌吉
『ヲルヅヲルス』……宮崎八百吉
『ユーゴー』……人見一太郎
『カーライル』……平田久

我社豈に敢て以上の文豪を、遺憾なく社會に紹介し得ると云はんや。唯だ文界寂寥の今日に於て、各その涯分を竭くし、以て聊か祖鞭を着せんと欲するのみ。若し江湖の君子、我社區々の微衷を了し首尾能く吾人が公言したる責任を遂げしめば豈に獨り我社の幸福のみならんや、來る七月中旬第一卷を發兌すべし。即ちその第一卷として發兌さるべきは、

平田久著

トマス、カーライル

美麗なる肖像入。定價十八錢。郵稅四錢、紙數二百頁

發兌元　東京京橋區日吉町　民友社

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行